東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』に見る唐詩の特徴的な用法について（5）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤,正光, 高橋,未来, 有木,大輔, 西村,諭, 長谷川,真史, 梁,旭璋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/152310

東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅰ　**71**: 9－36, 2020.

中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』に見る唐詩の特徴的な用法について（5）

佐藤　正光[*1]・高橋　未来[*2]・有木　大輔[*3]・
西村　　諭[*4]・長谷川真史[*1]・梁　旭璋[*5]

中国古典学分野

（2019年8月26日受理）

要　旨

本稿は，唐詩の語彙の特殊な用法を分析するものである。唐宋から金元明の詩詞戯曲などには，時代や地域性，社会階層によって生み出された俗語，口語，方言が詠み込まれている。それはオーソドックスな意味と異なるために，精確な解釈にはその特殊語彙（以下，異読と称する）の意味を把握することが必要である。そこで平成27年度紀要より，異読の用法を多く記載する中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』から唐詩の用例を中心に訳出し，検討を加えてきた。本稿でも，中国語のピンイン表記によるAからZまでの41項目を訳出検討した。

検討の結果，一つの語彙が助詞及び副詞，動詞といった複数の異なる語義を持つ例が多く見出された。全用例に共通して窺われることは，対句と互文及び音通の用法に異読が多いことである。

キーワード：唐詩，唐宋詞，異読，訓読，俗語，語彙解釈

はじめに

唐詩の語彙には，しばしば時代や地域性，社会階層によって生み出された俗語，口語，方言のたぐいが見られる。それらの語彙（以下，異読と称する）は一般的な意味とは異なるが，日本の伝統的な訓読に異読語彙の意味が含まれていない場合，その特殊な意味を捉えきれないという問題があった。そこで唐詩の精確な解釈をめざして，張相『詩詞曲語辞滙釈』（中華書局，1953年）その他を再編成し，異読語彙を多く収める中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』から唐詩の特殊な用例を訳出検討している（高橋未来・佐藤正光「中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』に見る唐詩の特徴的な用法について」〔平成27年度本紀要〕～佐藤正光・高橋未来・有木大輔・西村諭・長谷川真史「中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』に見る唐詩の特徴的な用法について（4）」〔平成30年度紀要〕）。

これまでの検討に続き，以下に，唐代までの詩文における異読の用例を検討したい。唐詩の引用にはすべて『全唐詩』（中華書局，1960年）を用いることとする。

＊1　東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 中国古典学分野（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊2　東京学芸大学個人研究員（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊3　筑波大学附属駒場中・高等学校（154-0001　世田谷区池尻4-7-1）
＊4　東京学芸大学附属国際中等教育学校（178-0063　練馬区東大泉5-22-1）
＊5　一橋大学大学院（186-8601　国立市中2-1）

1．底dǐ

①何，甚(なに)。隋·無名氏「読曲歌八十九首」其四十七（『楽府詩集』[1]巻46清商曲辞三）「月没星不亮，持底明儂緒（月没して星亮らかならざれば，底(なに)を持してか儂の緒を明らかにせん）」，何を持つという。王維[2]「慕容承携素饌見過（慕容承　素饌を携えて過ぎらる）」（『全唐詩』巻126）「空労酒食饌，持底解人頤（空しく労す　酒食の饌，底(なに)を持して人頤を解かん）」，意味は上の例と同じ。王維「愚公谷三首」其二（『全唐詩』巻126）「緣底名愚谷，都由愚所成（底に縁りて愚谷と名づく，都て愚の成す所に因る）」，何に因るという。杜甫[3]「可惜（惜しむべし）」（『全唐詩』巻226）「花飛有底急，老去愿春遅（花飛ぶこと底(なん)の急か有る，老い去れば春の遅からんことを願う）」，甚(なん)の急ぐことがあるのか，或いは何の急ぐことがあるのかという。白居易[4]「寒食日寄楊東川（寒食の日，楊東川に寄す）」（『全唐詩』457）「不知楊六逢寒食，作底歓娯過此辰（知らず楊六の寒食に逢うを，底(なん)の歓娯を作して此の辰を過ごさん）」，甚(なに)を作すという。また「早出晩帰（早に出でて晩に帰る）」（『全唐詩』451）「若抛風景常[5]閑坐，自問東京作底来（若し風景を抛ちて常に閑坐すれば，自ら問うらくは東京底(なに)をか作し来たると）」，甚(なに)を為すという。杜荀鶴[6]「釣叟」（『全唐詩』693）「渠将底物為香餌，一度擡竿一箇魚（渠　底物(なにもの)を将いて香餌と為さん，一度竿を擡ぐれば一箇の魚）」，何物という。また「蚕婦」（『全唐詩』693）「年年道我蚕辛苦，底事渾身着苧麻（年年道う我が蚕辛苦なり，底事(なにごと)ぞ身を渾いて苧麻を着ると）」，何事という。韓愈[7]「瀧吏」（『全唐詩』341）「潮州底処所，有罪乃竄流。儂幸無負犯，何由到而知（潮州 底(なん)の処所ぞ，罪有らば乃ち竄流せらる。儂 幸いにも犯に負(そむ)く無く，何に由りて到るかを知らん）」。

②這，此（これ）。

③許（～ほど，～ばかり）の意味，それほど，なんと。李商隠[8]「柳」（『全唐詩』巻539）「柳映江潭底有情，望中頻遣客心驚（柳　江潭に映じて底(なん)ぞ情有る，望中　頻りに客心を驚かしむ）」，「底有情」は「何と情があるのだろうか」，または「何の情がある」「なんとまあ情があること」。また「五言述徳抒情詩一首四十韻献上杜七兄僕射相公（五言徳を述べ情を抒ぶ詩一首四十韻，杜七兄僕射相公に献上す）」（『全唐詩』巻541）「雅宴初無倦，長歌底有情（雅宴 初め倦む無く，長歌 底(なん)ぞ情有る）」，意味は上の例と同じ。

④中。杜甫「哀王孫（哀しきかな王孫）」（『全唐詩』巻216）「長安城頭頭白鳥[9]，夜飛延秋門上呼。又向人家啄大屋，屋底達官走避胡（長安城頭　頭白の鳥，夜　延秋門上に飛びて呼ぶ。又た人家に向かいて大屋に啄めば，屋底の達官　走りて胡を避く）」，「屋底」は屋内である。

「底」には中の意味に限らず，下，前，辺り，そばの意味もある。杜甫「陪鄭広文遊何将軍山林（鄭広文に陪し，何将軍の山林に遊ぶ）十首」其二（『全唐詩』巻224）「翻疑柁楼底，晩飯越中行（翻つて疑う 柁楼の底(した)，晩飯　越中を行くかと）」，これは柁楼の下という。また杜甫「昼夢」（『全唐詩』231）「故郷門巷荊棘底，中原君臣豺虎辺（故郷の門巷　荊棘の底(うち)，中原の君臣　豺虎の辺り）」，これと「辺」の字が対になり，荊棘の中という，または荊棘の辺りという。又た「秦州雑詩二十首」其十二（『全唐詩』巻225）「秋花危石底，晩景臥鐘辺（秋花　奇石の底(あた)り，晩景　臥鐘の辺り）」，これも「辺」と対で，奇石の辺りという。白居易「代州民問（州民に代りて問う）」（『全唐詩』巻441）「龍昌寺底開山路，巴子台前種柳林（龍昌寺の底(まえ)　山路開き，巴子 台前 柳林を種う）」，「前」の字が対で，寺の前または寺のそばという。「金閨怨[10]」（『全唐詩』巻442）「秋霜欲下手先知，灯底裁縫剪刀冷（秋霜 手を下さんと欲して先ず知る，灯底 裁縫　剪刀 冷やかなり）」，これは灯の下，または灯の前という。王建[11]「宮詞一百首」其八十九（『全唐詩』巻302）「院院燃灯如白日，沈香火底坐吹笙（院院 灯を燃やすこと白日の如く，沈香 火の底(あた)り 坐して笙を吹く）」，これは沈香の火のそばまたは火の辺りという。また「宮詞一百首」其九十（『全唐詩』巻302）「樹頭樹底覓残紅，一片西飛一片東（樹頭 樹底 残紅を覓め，一片西のかた飛びて一片東す）」，「頭」の字が対で文を成し，単独で解することはできないので，意味は樹の上と樹の下あるいは樹の前と樹の後ろである。韓偓[12]「南浦」（『全唐詩』巻681）「直教筆底有文星，亦応難状分明苦（直だ筆底に文星有らしむも，亦た応に分明の苦しきを状(あらわ)し難し）」，これは筆下という。按ずるに「分明」は「分離」と同じ，南浦は送別が行われる場所だからである。

⑤得ると同じ意味。杜甫「赴青城県出成都寄陶王二少尹（青城県に赴くとき成都に出でて陶・王の二少尹に寄す）」（『全唐詩』巻226）「文章差底病，回首興滔滔（文章　病を底るを差やし，首を回らせば 興 滔滔たり）」，「差」は「瘥」，文章は病を癒すという。元稹[13]「病醉戯作呉吟贈盧十九経済張三十四弘辛丈丘度[14]（酔いに病みて戯れに呉吟を作り，盧十九経済，張三十四弘，辛丈丘度に贈る）」（『全唐詩』巻411）「醉伴見儂因病酒，道儂無酒不相窺。那知下薬還沽底，人去人來剩一卮（醉伴　儂の酒に因りて病むを見て，儂に道う　酒無くんば相い窺わずと。那んぞ知らん下薬還た沽い底るを，人去り人来たりて一卮を剰す）」，「還沽底」は「還沽得（還た沽い得る）」。

［抵］dǐ 底の①と同じ。温庭筠[15]「西洲曲」（『全唐詩』巻26）「去帆不安幅，作抵使西風（帆去りて幅を安んぜず，抵を作して西風を使わん）」，「作抵」はどのように西風を利用しようとするのかという。

［底里］dǐlǐ 底と里は同義なので，連用して一語となる。里（中）である。（高橋）

2．逗 dòu

①臨む，到る。「投」と通じる。「投」（『詩詞曲語辞辞典』608頁）を見よ。

②趁，趕（追う）。李嘉祐[16]「白鷺」（『全唐詩』巻207）「江南淥水多，顧影逗軽波（江南 淥水多く，影を顧みて軽波を逗う）」，「逗軽波」は，さざなみを趁う，またはさざなみを逐うという。陸亀蒙[17]「晩渡（晩に渡る）」（『全唐詩』巻629）「各様蓮船逗村去，笠檐蓑袂有残声（各様の蓮船 村に逗いて去り，笠檐蓑袂　残声有り）」。「逗村去」とは村の方へ行くこと，「趁墟」・「趕市[18]」（市場に行く）の意味と似ている。方干[19]「将帰湖上留別陳宰（将に湖上に帰らんとして陳宰に留別す）」（『全唐詩』巻653）「帰去春山逗晩晴，縈廻樹石罅中行（春山に帰去すれば晩に逗いて晴れ，樹石を縈廻して罅[20]中に行く）」，暮れ方の明るい中を帰るという。

③駐まる，逗留の意味。劉孝綽[21]「夕逗繁昌浦（夕べに繁昌浦に逗む）詩」（『先秦漢魏晋南北朝詩』[22]梁詩巻16）「疑是辰陽宿，於此逗孤舟（疑うらくは是れ辰陽の宿かと，此に於いて孤舟を逗む）」，「逗孤舟」は孤舟を駐める。謝微「済黄河応教（黄河を済りて教に応ず）詩」（『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩巻15）「朝辞金谷戍，夕逗黄河渚（朝に辞す金谷の戍，夕べに逗む黄河の渚）」，夕方に黄河の渚に留まるという。張謂[23]「早春陪崔中丞浣花溪宴得暄字（早春　崔中丞の浣花溪の宴に陪して，暄字を得）」（『全唐詩』197）「紅亭移酒席，画鷁逗江村（紅亭 酒席を移し，画鷁[24]江村に逗む）」，「逗江村」は江村に駐まるという。杜甫「将別巫峡贈南卿兄瀼西果園四十畝（将に巫峡に別れんとして南卿兄に瀼西の果園四十畝を贈る）」（『全唐詩』巻232）「残生逗江漢，何処狎樵漁（残生　江漢に逗むるも，何れの処にか樵漁に狎れん）」，「逗江漢」は「江漢に駐まる」という。韓愈「南山詩（南山の詩）」（『全唐詩』巻336）「或羅若星離，或蓊若雲逗（或いは羅なること　星の離なるが若く，或いは蓊んなること　雲の逗まるが若し）」，雲が駐まるという。元稹「開元観閑居酬呉士矩侍御三十韻（開元観の閑居にて呉士矩侍御に酬ゆ三十韻）」（『全唐詩』巻405）「簫声吟茂竹，虹影逗虚檐（簫声　茂竹に吟じ，虹影　虚檐に逗む）」，光を駐めるという意味。陸亀蒙「奉和襲美太湖詩（襲美の太湖の詩に奉和す）二十首 暁次神景宮（暁に神景宮に次る）」（『全唐詩』巻618）「暁帆逗碕岸，高歩入神景（暁帆　碕岸に逗まり，高歩　神景に入る）」，最初の二句は暁に宿る様子を表し，船の帆を岸に駐めるという意味である。

④透る，露わになる。梁の武帝[25]「藉田詩」（『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩巻1）「厳駕佇霞昕，浥露逗光暁（厳駕　霞昕[26]に佇み，浥露に光暁逗る）」，浥露の中に暁の光が露わになるという。薛能[27]「黄河」（『全唐詩』558）「勇逗三峰坼，雄標四瀆尊（勇にして三峰を逗して坼き，雄にして四瀆[28]を標して尊し）」，三峰は華山を指し，河の流れが華山を通って切り崩し，龍門ができたという。

⑤引く。杜甫「懐錦水居止（錦水の居止を懐う）二首」其一（『全唐詩』229）「朝朝巫峡水，遠逗錦江波（朝朝 巫峡の水，遠く逗く錦江の波）」，仇兆鰲の注[29]に「逗，引也（逗は，引くなり）」という。

［挑逗］tiǎodòu誘惑する，引き込む。
［拖逗］tuōdòu誘惑する。
［迤逗］tuōdòu①引っ張る，誘惑する，引き起こす。②からみつく，ぐずぐずする，時間を無駄に過ごす。
（高橋）

3．都来 dūlái

全部，過ぎない，数えてみると。寒山[30]「五言五百篇，七字七十九。三字二十一，都来六百首（五言は五百篇，七字は七十九。三字は二十一，都来て六百首）」，これは全部という。羅隠[31]「晩眺」（『全唐詩』巻664）「天如鏡面都来静，地似人心総不平（天は鏡面の如くして都来て静かなるも，地は人心に似て総べて平らかならず）」，これも全部という。また「送顧雲下第（顧雲の下第するを送る）」（『全唐詩』663）「百歳都来多幾日，不堪相別又傷春（百歳　都来うれば多きこと幾日ならん，相い別れて又た春を傷むに堪えず）」，これは数えてみるとという。

［都］dū都来の「都」一字のみを用いているが，意味は「都来」と同じ。白居易「解蘇州自喜[32]（蘇州を解かれて自ら喜ぶ）」（『全唐詩』巻447）「身兼妻子都三口，鶴与琴書共一船（身は妻子を兼ねて都て三口，鶴と琴書と共に一船）」，これは全部という。（高橋）

4．端居 duānjū

家にこもる。駱賓王[33]「艶情代郭氏答盧照鄰（艶情　郭氏の盧照鄰に答うるに代う）」（『全唐詩』巻77）「思君欲上望夫台，端居懶聴将雛曲（君を思いて望夫の台に上らんと欲するも，端く居りて将雛の曲[34]を聴くに懶し）」，また「遠使海曲春夜多懐（遠く海曲に使いして春夜懐うこと多し）」（『全唐詩』巻79）「長嘯三春晩，端居百慮盈（長嘯す三春の晩，端く居りて百慮盈つ）」。張九齢[35]「聴箏（箏を聴く）」（『全唐詩』巻48）「端居正無緒，那復発秦箏（端く居りて正に緒無く，那ぞ復た秦箏を発す）」。王維「登裴秀才迪小台（裴秀才迪の小台に登る）」（『全唐詩』巻126）「端居不出戸，満目望雲山（端く居りて戸を出でず，満目　雲山を望む）」。白居易「送呂漳州（呂漳州を送る）」（『全唐詩』巻452）「端居惜風景，屢出労僮僕（端く居りて風景を惜しみ，屢しば出でて僮僕を労す）」，「旱熱二首」其二（『全唐詩』巻453）「薄食不飢渇，端居省衣裳（薄食して飢渇せず，端く居りて衣裳を省く）」，「病中数会張道士見譏以此答之（病中数しば会し，張道士譏らる。此を以て之に答う）」（『全唐詩』巻459）「亦知数出妨将息，不可端居守寂寥（亦た知る　数しば出づれば将息を妨げ，端く居りて寂寥を守るべからざるを）」。また白居易の詩に「端居詠懐（端居して懐を詠ず）」（『全唐詩』巻439）と題する七律があり，その首聯と頷聯は「賈生俟罪心相似，張翰思帰事不如。斜日早知驚鵬鳥，秋風悔不憶鱸魚（賈生罪を俟つ　心相い似たるも，張翰帰を思う　事如かず。斜日早に知る　鵬鳥に驚くを，秋風　鱸魚を憶わざるを悔ゆ）」といい，その末句にも「欲携妻子買山居（妻子を携えて山居を買わんと欲す）」という。仕官と隠遁の両方はできないとの意味で，このとき白居易がまだ隠居してのんびりしていなかったことは明らかである。

㊐孟浩然[36]「望洞庭湖贈張丞相（洞庭湖を望みて張丞相に贈る）」（『全唐詩』巻160）「欲済無舟楫，端居恥聖明（済らんと欲するも舟楫無く，端居して聖明に恥ず）」の「端居」はまた「平居草野（つねに草野にいる）」（『唐詩三百首』章燮注）や，「隠居独処（隠居して一人でいる）」，「平居閑処（常に家にいる）」（『歴代文学作品選』文研所『唐詩選』[37]）等とも解釈されている。（高橋）

5．児 ér

人。薛能「海棠」（『全唐詩』巻560）「明年応不見，留此贈巴児（明年　応に見わざれば，此を留どめて巴児に贈るべし）」。温庭筠「訪知玄上人遇暴経因有贈（知玄上人を訪ぬれば経を暴すに遇い，因りて贈る有り）」（『全唐詩』巻583）「客児自有翻経処，江上秋来蕙草荒（客児　自ら経を翻す処有り，江上　秋来たりて蕙草

荒れたり)」，ともに巴人，客人というのにひとしく，幼いという意味は全くない。

㊨ 陸游『老学庵筆記』[38]巻六に「晋語児人二字通用。『世説新語』[39]載桓温行経王大将軍墓，望之曰「可児，可児」，蓋謂可人為可児也。故『晋書』及孫綽与箋，皆以為可人。又陶淵明不欲束帯見郷里小児，亦是以小人為小児耳，故『宋書』云「郷里小人」也（晋の語の“児”と“人”の二字は通用す。『世説新語』に桓温行きて王大将軍の墓を経るに，之を望みて「可児なり，可児なり」と曰うを載す。蓋し「可人」と謂うを「可児」と為すなり。故に『晋書』[40]及び孫綽と庾亮の箋は皆以為えらく「可人」と。又た陶淵明が束帯するを欲せずして郷里の小児を見るも，亦た是れ「小人」を以て「小児」と為すのみ，故に『宋書』[41]に「郷里小人」と云う)」と。実際には「児」を「人」の意味とするのは晋代だけではなく，どの時代にもこの用例があった。恐らく方言の発音の差異に関係する。（高橋）

6.反側 fǎncè

唐代の人のことばで，反抗する，そむく，逆らう。杜甫「彭衙行」(『全唐詩』巻217)「癡女飢咬我，啼畏虎狼聞。懐中掩其口，反側声愈嗔（癡女飢えて我を咬む，啼きては虎狼の聞くを畏る。中(うち)に懐きて其の口を掩えば，反側して声愈いよ嗔(いか)る)」。李商隠「驕児詩」(『全唐詩』巻541)「階前逢阿姊，六甲頗輸失。凝走弄香奩，抜脱金屈戌。抱持多反側，威怒不可律（階前に阿姊に逢い，六甲　頗る輸失す。凝(た)め走りて香奩を弄び，抜脱す金の屈戌。抱持すれば反側すること多く，威怒するも律すべからず)」。これは子どもがいたずらをして化粧箱を散らかすので，抱きかかえてやめさせると，怒って反抗することをいう。杜甫の詩と比べると，状況はちょうど同じである。（高橋）

7．外 wài

①方向詞，内側を表す。杜甫「独立（独り立つ)」(『全唐詩』巻225)「空外一鷙鳥，河間双白鴎（空の外(うち)の一鷙鳥(しちょう)，河の間の双白鴎)」。盧綸[42]「同耿拾遺春中題第四郎新修書院（耿拾遺と同(とも)に春中に第四郎が新たに書院を修(おさ)むるに題す)」(『全唐詩』巻278)「学就晨昏外，歓生礼楽中（学びは晨昏の外(うち)に就(な)り，歓びは礼楽の中に生ず)」，「外」は均しく「間」「中」と互文である。

②方向詞，辺りを表す。皇甫冉[43]「寄劉方平大谷田家（劉方平が大谷の田家に寄す)」(『全唐詩』巻250)「籬辺潁陽道，竹外少姨峰（籬の辺(あたり)の潁陽の道，竹の外(あたり)の少姨の峰)」，これは「辺」と互文であり，辺りの意味をなす。王揆[44]「長沙六快詩[45]（長沙の六快の詩)」(『全唐詩』巻770)「湖外風物奇，長沙信難続（湖の外(あたり)の風物　奇なり，長沙は信(まこと)に続き難し)」。

③方向詞，上を表す。岑参[46]「早秋与諸子登虢州西亭観眺（早秋　諸子と虢州の西亭に登りて観眺す)」(『全唐詩』巻201)「亭高出鳥外，客到与雲斉（亭は高くして鳥　外(うえ)に出で，客到りて雲と斉(ひと)しくす)」，この「上」としての意味は，勢いよく鳥が飛びあがることをいう。王維「送陸員外（陸員外を送る)」(『全唐詩』巻125)「九河平原外，七国薊門中（九河　平原の外(うえ)，七国　薊門の中)」。孟雲卿[47]「苦雨」(『全唐詩』巻157）の残句「安知浮雲外，日月不運行（安(いずく)んぞ知らん　浮雲の外(うえ)，日月　運行せず)」。孟郊[48]「辺城吟」(『全唐詩』巻372)「焼烽碧雲外，牧馬青坡巓（烽を焼く　碧雲の外(うえ)，馬を牧す　青坡の巓(いただき))」。戴叔倫[49]「暮春感懐（暮春に懐いに感ず)」其二（『全唐詩』巻273)「悠悠往事杯中物，赫赫時名扇外塵（悠悠たる往事　杯の中の物，赫赫たる時名　扇の外(うえ)の塵)」。李益[50]「水亭夜坐賦得暁霧（水亭にて夜に坐して暁霧を得るを賦す)」(『全唐詩』巻283)「漠漠沙上路，沄沄洲外田（漠漠たる沙の上の路，沄沄[51]たる洲の外(うえ)の田)」。韋荘[52]「天仙子」其三（『全唐詩』巻892)「蟾彩霜華夜不分，天外鴻声枕上聞（蟾彩　霜華　夜分かたず，天の外(うえ)の鴻声　枕上に聞く)」。（有木）

8．往往wǎngwǎng

時々。「往往」は「時時」と意味は同じではないが，「往往」は様子が普段このようであることを指し，「時時」は動作がしばしば起こることを指すが，唐詩の中では，「往往」は時に「時時」に相当する。李白[53]「贈宣城宇文太守兼呈崔侍御（宣城宇文太守に贈り，兼ねて崔侍御に呈す）」（『全唐詩』巻171）「時時慰風俗，往往出東田（時時　風俗を慰め，往往（ときどき）　東田に出づ）」，「往往」は「時時」と対で，「出東田」は太守が春に行楽をすることを指す。李白「魯郡尭祠送竇明府薄華還西京（魯郡の尭祠にて竇明府薄華の西京に還るを送る）」（『全唐詩』巻175）「廟中往往来撃鼓，尭本無心爾何苦（廟中　往往（ときどき）　来たりて鼓を撃つ，尭　本（も）と無心　爾（なんじ）　何ぞ苦しまん）」。李白「与諸公送陳郎将帰衡陽（諸公と陳郎将の衡陽に帰るを送る）」（『全唐詩』巻177）「迴飆吹散五峰雪，往往飛花落洞庭（迴飆　吹き散らす五峰の雪，往往（ときどき）　飛花　洞庭に落つ）」。杜甫「贈王二十四侍御契四十韻（王二十四侍御契に贈る　四十韻）」（『全唐詩』巻228）「往往雖相見，飄飄愧此身（往往（ときどき）　相い見ると雖も，飄飄　此の身を愧づ）」。劉眘虚[54]「寄閻防（閻防に寄す）」（『全唐詩』巻256）「深路入古寺，乱花随暮春。紛紛対寂寞，往往落衣巾（深路　古寺に入り，乱花　暮春に随う。紛紛として寂寞に対し，往往（ときどき）　衣巾落つ）」。（有木）

9．為復wéifù

選択関係の連語で，「復」のことで，もしくは，あるいはとほぼ同じ。王維「問寇校書双渓（寇校書が双渓を問う）」（『全唐詩』巻125）「君家少室西，為復少室東（君が家は少室の西，為復（あるいは）少室の東）」。

［為］wéi「為復」の省略で，意味は「為復」と同じ。『文選』巻36　王元長[55]「永明十一年策秀才文（永明十一年，秀才に策する文）五首」其三「豈薪槱之道未弘，為網羅之目尚簡（豈に薪槱（しんゆう）の道　未だ弘（ひろ）からず，為（あるいは）網羅の目すら尚お簡（おろそ）かなるか）」，李周翰注に「言今之求吏，未得賢者，豈薪積之未久，為復網羅之目尚略（言うこころは今の吏を求むるは，未だ賢者を得ず，豈に薪の之（これ）を積むは未だ久しからず，為復（あるいは）網羅の目尚お略ならん）」，李周翰はただ「為復」字を「為」字に解釈している。『荘子』徳充符の郭象注[56]に「不知先生洗我以善道故邪。我為能自反邪（知らず　先生　我を洗うに善道の故を以てするか。我為（あるいは）能（よ）く自ら反らんか）」，「我為」はおそらく「為我」の倒置であり，もし「為我能自反邪」に作れば，この「為」字も同義である。（有木）

10．委wěi

知る，承知する。「知」は「委」に相当し，唐人の慣用語である。道宣『続高僧伝』[57]巻4「玄奘伝」「迦湿弥羅国即此俗常伝罽賓是也，莫委‘罽賓’由何而生（迦湿弥羅国は即ち此の俗　常に伝うる罽賓は是れなり，‘罽賓’の何に由って生ずるかを委（し）る莫（な）し）」。韓愈「瀧吏」（『全唐詩』巻341）「官当明時来，事不待説委（官　明時に当たって来たる，事　説（と）くを待たずして委（し）るなり）」，「不待説委」は説明を待たずに分かるの意味。杜甫「示従孫済（従孫の済に示す）」（『全唐詩』巻216）「平明跨驢出，未知適誰門（平明に驢に跨（またが）り出づるに，未だ知らず誰が門に適（ゆ）くかを）」，この中の「知」字は銭謙益『銭注杜詩』巻1，仇兆鰲『杜詩詳注』巻3，『全唐詩』では異同として「一作委（一に委に作る）」と示す。

「委」のこの意味は六朝時代にはあった。例えば，梁・慧皎『高僧伝』[58]巻1「竺法蘭伝」「又昔漢武穿昆明池底得黒灰，以問東方朔，朔云：‘不委，可問西域人’（又（ま）た昔　漢武　昆明池を穿ち，底より黒灰を得たり，以て東方朔に問う，朔　云う‘委（し）らず，西域の人に問うべし’と）」は，晋・曹毗『志怪』[59]にある同一の事に関する記述，「漢武鑿昆明池，極深，悉是灰墨，無復土，挙朝不解，以問東方朔，朔曰：‘臣愚不足以知之，可問西域人’（漢武　昆明池を鑿ち，極めて深し，悉（ことごと）く是（こ）れ灰墨なり，復（ま）た土無く，朝を挙げても解せず，以て東方朔に問う，朔　曰く‘臣　愚かにして以て之（これ）を知るに足らず，西域の人に問うべし’と）」を参照すれば，『高僧伝』の「不委」は知らないの意味であることが証明できる。

［委知］wěizhī承知する。「委」と「知」は同義語の連文である。孔穎達『春秋左伝正義』[60]隠公元年「其実是大夫与否，亦不可委知也（其の実　是れ大夫なるや否や，亦た委知るべからず）」。（有木）

11. 畏wèi

心配に備える言葉。恐れる。杜甫「羌村」三首其二（『全唐詩』巻217）「晩歳迫偷生，還家少歓趣。嬌児不離膝，畏我却復[61]去（晩歳　偷生に迫られ，家に還るも歓趣少なし。嬌児　膝を離れず，我を畏れて却って復た去る）」，私が家に帰っても私から離れていくことを恐れることをいう。

王維「宮槐陌」（『全唐詩』巻128）「応門但迎掃，畏有山僧来（応門　但だ迎掃す，畏うるに山僧の来たる有らんことを）」，高僧が来ることに備えること。また「蓮花塢」（『全唐詩』巻128）「弄篙莫濺水，畏湿紅蓮衣（篙を弄して水を濺ぐこと莫かれ，紅蓮衣を湿らさんことを畏ぐ）」，「畏湿」は「防湿」の意味である。また「雑詩三首」其三（『全唐詩』巻128）「已見寒梅発，復聞啼鳥声。愁心[62]視春草，畏向階前生（已に寒梅の発くを見，復た啼鳥の声を聞く。愁心　春草を視，階前に向って生ずるに畏う）」，春草のまた生えることに備えること。孟浩然「早発漁浦潭（早に漁浦潭を発す）」（『全唐詩』巻159）「飲水畏驚猿，祭魚時見獺（水を飲みて猿に驚くに畏う，魚を祭りて時に獺を見る）」，猿に驚くことに備えること。王建「寒食行」（『全唐詩』巻298）「牧童駆牛下塚頭，畏有人家[63]来灑掃（牧童　牛を駆けて塚頭を下る，畏うるに人家の来たりて灑掃する有らん）」，人が来て墓を掃除することに備えること。以上の「畏」字はひとしく「怕」字に代用することができる。

［畏人］wèirén「畏」の恐れるの意味を転じて恐れをなして避けるの意味，人の世と合わずに人を避け，世を避けること。魏文帝[64]「雑詩」二首其二（『先秦漢魏晋南北朝詩』魏詩巻4）「呉会非我郷，安得久留滞。棄置勿復陳，客子常畏人（呉会は我が郷に非ざれば，安んぞ久しく留滞するを得ん。棄置して復た陳ぶる勿かれ，客子　常に人を畏く）」。杜甫「畏人（人を畏く）」（『全唐詩』巻227）「畏人成小築，褊性合幽棲（人を畏けて小築を成し，褊性　幽棲に合す）」，また「暮春題瀼西新賃草屋（暮春に瀼西の新たに賃する草屋に題す）五首」其二（『全唐詩』巻229）「畏人江北草，旅食瀼西雲（人を畏く　江北の草，旅食す　瀼西の雲）」。（有木）

12. 謂wèi

料る，知る。往々にして否定詞，あるいは疑問詞と連用し，意外なことが起こったことを表す。普段の「告訴」「言説」と意味は同じであり，「以為」の解釈の用法と区別される。杜甫「絶句漫興九首」其九（『全唐詩』巻227）「隔戸楊柳弱嫋嫋，恰似十五女児腰。誰謂朝来不作意，狂風挽断最長条（戸を隔つる楊柳弱くして嫋嫋たり，恰も似たり　十五女児の腰に。誰か謂らん　朝来　意を作さず，狂風　挽き断つ最も長き条）」，「誰謂」は「誰知」である。劉長卿[65]「獄中見壁画仏（獄中に壁画仏を見る）」（『全唐詩』巻148）「不謂銜冤処，而能窺大悲（謂らず　冤を銜む[66]処，而して能く大悲を窺う）」，「不謂」は「不料」である。柳宗元[67]「覚衰（衰えを覚ゆ）」（『全唐詩』巻351）「久知老将[68]至，不謂便見侵（久しく知る　老の将に至らんとするを，謂わざりき　便ち侵されんとは）」。

［為］wèi謂うと同じ。元稹「酬楽天武関南見微之題山石榴花詩（楽天の「武関の南にて微之の山石榴の花に題す詩を見る」に酬ゆ）」（『全唐詩』巻416）「比因酬贈為花時，不為君行不復知（比因花時に為るに酬贈す，君が行を為わざれば復た知らず）」。（有木）

13. 聞wén

①趁う，乗じる。「聞」の本義と異なる。杜甫「示獠奴阿段（獠奴阿段に示す）」（『全唐詩』巻229）「郡人入夜争余瀝，豎子尋源独不聞（郡人　夜に入りて余瀝を争い，豎子　源を尋ねて独り聞わず）」，「聞」は趁う。

夜中に泉の水を汲むために村人と競い乗じないことを良しとし，一人で源泉に水を探しにいくということ。下文にある「怪爾常穿虎豹群（爾が常に虎豹の群を穿つを怪しむ）」は，山に深く分け入って水源を探し求めることができることに感嘆すること。また「季夏送郷弟韶陪黄門従叔朝謁（季夏　郷弟韶の黄門従叔に陪して朝謁するを送る）」（『全唐詩』巻231）「莫度清秋吟蟋蟀，早聞黄閣画麒麟（度る莫かれ　清秋に蟋蟀の吟ずるを，早に黄閣を聞って　麒麟に画かるるを）」は，仇兆鰲注に朱注の「時[69]杜鴻漸以黄門侍郎同平章事鎮蜀大暦二年六月自蜀還朝（時に杜鴻漸　黄門侍郎同平章事を以て蜀を鎮め大暦二年六月に蜀より朝に還る）」を引き，「早聞云々」は早く黄閣が蜀を鎮めた機会に乗じることを望んで，麒麟閣に肖像画が描かれた故事のような功績のある臣下となること。また「舎弟観赴藍田取妻子到江陵喜寄（舎弟の観　藍田に赴き妻子を取り江陵に到る　喜びて寄す）三首」其三（『全唐詩』巻231）「比年酒病聞涓滴[70]，弟勧兄酬何怨嗟（比年　酒に病むも涓滴を聞って，弟が勧めて兄が酬いれば何ぞ怨嗟せん）」，「比年酒病」は多く飲むことができず，少しの酒に乗じて一番の喜びを得ること。また「贈衛八処士（衛八処士に贈る）」二首其二（『全唐詩』巻216）「夜雨剪春韭，新炊間黄粱（夜雨　春韭を剪り，新炊黄粱を間う）」，「間」はあるいは「聞」につくる。「新炊聞黄粱」は倒置の句法で，黄粱に乗じて新たに炊くこと。張籍[71]「贈賈島（賈島を贈る）」（『全唐詩』巻385）「封書乞米趁朝炊（封書　米を乞い　朝を趁って炊く）」から証明される。この解釈のように，すべての詩の前後の文は慌ただしく懇親に客をもてなす状況としてもとても合致する。韋応物[72]「早春対雪寄前殿中元侍御（早春　雪に対して前の殿中の元侍御に寄す）」（『全唐詩』巻187）「幾日東城陌，何時曲水浜。聞閑且共賞，莫待繡衣新（幾日か東城の陌，何れの時か曲水の浜。閑を聞って且つ共に賞す，繡衣の新たなるを待つこと莫かれ）」，「聞閑」は閑に乗じること。王建「秋日後」（『全唐詩』巻301）「住処近山常足雨，聞晴僖曝旧芳茵（住む処　山に近く常に雨足る，晴れを聞いて僖曝す旧芳の茵）」，「聞晴」は晴れに乗じること。また「江南三台詞四首」其四（『全唐詩』巻301）「聞身強健且為，頭白歯落難追（身の強健なるを聞って且に為さんとするも，頭白く歯落ち追い難し）」，「聞身強健」は体が丈夫であることに乗じること。また「冬至後招于秀才（冬至の後に于秀才を招く）」（『全唐詩』巻301）「聞閑立馬重来此（閑を聞って　馬を立めて重ねて此に来たると）」，あるいは「乗閑立馬」につくる。「聞」は「乗」であることがますます証明される。白居易「以詩代書寄戸部楊侍郎勧買東隣王家宅（詩を以て書に代え，戸部楊侍郎に寄せ，東隣の王家宅を買うを勧む）」（『全唐詩』巻456）「林園亦要聞閑置，筋力応須及健迴（林園も亦た閑を聞って置くを要し，筋力も応須に健なるを及って迴らすべし）」，「聞」と「及」とは互文であり，「聞閑」は閑に乗じることで，「及健」は健康に乗じること。また「二月五日花下作（二月五日，花下の作）」（『全唐詩』巻443）「聞有酒時須笑楽，不関身事莫思量（酒有る時を聞って須らく笑い楽しむべし，身に関せざる事は思量すること莫からん）」，「聞有酒時」は酒のある時に乗じること。また「感桜桃花因招飲客（桜桃花に感じ，因りて飲客を招く）」（『全唐詩』巻441）「誰能聞此来相勧，共泥春風酔一場（誰か能く此を聞って　来たりて相い勧め，共に春風に泥して一場に酔わん）」，意味はこの酔うことに乗じること。

②見るの意味を表す。杜甫「暁望」（『全唐詩』巻230）「高峰寒上日，畳嶺宿霾雲。地坼江帆隠，天清木葉聞（高峰　上日寒く，畳嶺　霾雲宿る。地坼けて江帆隠れ，天清くして木葉を聞る）」，これは五言律詩の頷聯・頸聯で，四句ともみな白帝城に早朝楼に登って見たものを描写しているのは，詩題の「暁望」が既に明らかにしている。末句で引き締めて因果関係を含んでおり，意味は天気が朗らかなため，はっきりと枯葉の舞う情景が見え，暗に『楚辞』巻２「九歌・湘夫人」「洞庭波兮木葉下（洞庭　波たち木葉下つ）」の意味を取っている。『杜詩鏡銓』[73]巻17に張縉注を引き，「天清無風雨，故木葉声落可聞（天清らかに風雨無く，故に木葉の声落つるを聞くべし）」，『杜少陵集詳注』[74]巻20に黄生注を引き，「地坼岸高，故江帆隠伏；風静天清，故葉落聞声（地は坼け岸は高し，故に江帆は隠れ伏す；風静かに天清くして，故に葉落ちて声を聞く）」，二つの注は字を添えて解釈するだけでなく，「天清」とその前３句の含意さえ，ほぞがぴったりとあうようにはいかない。実際，「聞」は「見」と互いに通じることは杜甫の詩集の中に例証があり，「木皮嶺」（『全唐詩』巻218）「仰干塞大明，俯入裂厚坤。再聞虎豹闘，屡跼風水昏（仰ぎて干せば大明[75]塞がり，俯して入れば厚坤[76]裂く。再び聞る　虎豹の闘うを，屡しば風水の昏きに跼る）」，この４句も嶺に登った時に経たもの見たものを描写し，「聞」も「見」の意味であり，もし聞くの意味に解釈すれば，字を添えて解釈すべきで，「虎豹闘」をもって虎と豹が決闘する声と言いくるめることができる。

杜甫詩のほかはなお同時期，あるいはそう遠くなく隔てた時代の詩作や変文に証明される。岑参「澧頭送蔣侯（澧頭に蔣侯を送る）」（『全唐詩』巻198）「君住澧水北，我家澧水西。両村弁喬木，五里聞鳴鶏。飲酒渓雨過，弾棋山月低。徒聞蔣生径，爾去誰相携（君は住む　澧水の北，我は家す　澧水の西。両村　喬木を弁じ，五里　鳴鶏を聞く。酒を飲めば渓雨過ぎ，棋を弾てば山月低し。徒らに蔣生の径を聞るのみ，爾去らば誰とか相い携えん）」，二番目の「聞」はあるいは「開」につくり，おそらくはこの句の「聞」は前の「聞鳴鶏」と同字相犯として，「聞」に「見」の意味がありむやみに改変したことを知らない。実際，初盛唐の詩人は時に複字を避けず，この句の中の「聞」もまた見るに解釈すべきで，尾聯の意味も，あなたが帰った後，ただあなたの庭の中に小道を見ることができても，ともに手を携えて遊ぶ者がいないということ。また李商隠「詠雲（雲を詠む）」（『全唐詩』巻541）「捧月三更断，蔵星七夕明。纔聞飄迴路，旋見隔重城（月を捧げて三更　断え，星を蔵して七夕　明なり。纔かに飄迴の路を聞，旋いで隔重の城を見る）」，「聞」と「見」は互文である。

「聞」は「見」と互いに通じることはやや早い時代，あるいは同時代の散文中にも類似の用例がある。劉宋・劉敬叔『異苑』[77]巻6「河内司馬惟之奴天雄死後還，其婦来喜聞体有鞭痕而脚著鎖。問云：‘有何過至如此。’曰：‘曽酔，窃罵大家，今受此罪’（河内の司馬惟の奴天雄　死せる後に還り，其の婦　来たりて喜ぶも体に鞭痕有りて脚の鎖に著くを聞る。問いて云う：‘何の過有りて此くのごとく至るや’と。曰く：‘曽て酔い，窃かに大家を罵り，今　此の罪を受く’と）」。『太平広記』[78]巻304「暢璀」は『戎幕閑談』を引き，「（老翁）乃遺一書曰：‘慎不可先覧，但経一事，改一官，即聞[79]之’（乃ち一書を遺して曰く：‘慎しんで先に覧るべからず，但だ一事を経て，一官を改めば，即ち之を聞る’と）」，この「聞」の例も前文の「覧」字と対応し，「見る」の意味を表してはっきりと見やすいこと。「聞」「見」が互いに通じることは修辞学のいわゆる「通感」に由来すべきである。蔣宗許・劉雲生「『唐宋筆記語辞彙釈』商補」の一文に「聞作看講，釈家謂之耳中見色，反之音亦可曰観，観世音之名，理同于此（聞は看に作るの講は，釈家　之を耳中に色を見るを謂い，之に反って音も亦た観と曰うべし，観世音の名，理は此れに同じ）」（『古籍整理与出版情況簡報』257期）とは，ある特定の詞語について言っているのに過ぎず，通感の意味を含んでいるのは，修辞学上の範囲に属するか，あるいは語彙学の範囲に属しているかで，それが言語作品中に使用される頻度によって確定される。

㊨「聞」の「見」の意味に関して，聞と見が互いに通じるかは不明なので，注釈者は往々にして常義（第一義）にこだわる。清人の施鴻保『読杜詩説』[80]巻2に「兵車行」（『全唐詩』巻216）に「前云‘君不聞漢家山東二百州，千村万落生荊杞’，後云‘君不見青海頭，古来白骨無人収’……今按‘見’‘聞’二字似互誤，‘村落荊杞’当云‘見’，不当云‘聞’；‘鬼哭啾啾’当云‘聞’，不当云‘見’也。或言詩作于長安中，故于‘山東二百州’云‘聞’；是送人至青海者，故于‘古来白骨’云‘見’。説亦可通（前に‘君聞かずや　漢家山東の二百州，千村万落　荊杞を生ずるを’と云い，後に‘君見ずや青海の頭，古来白骨　人の収むる無し’と云う……今　按ずるに‘見’と‘聞’の二字　互いに誤るが似し，‘村落荊杞’は当に‘見る’と云うべく，当に‘聞く’と云うべからず；‘鬼哭啾啾’は当に‘聞く’と云うべく，当に‘見る’と云うべからざるなり。或いは言う　詩は長安の中に于いて作り，故に‘山東二百州’に‘聞く’と云う；是れ人の青海に至る者を送り，故に‘古来白骨’を‘見る’と云うなり。説も亦た通ずべし）」と論じる。（有木）

14. 問 wèn

向かう。杜甫「入宅（宅に入る）三首」其二（『全唐詩』巻229）「相看多使者，一一問函関（相い看れば使者多し，一一　函関に問う）」，函関に向かうをいう。また「春日江村」五首其四（『全唐詩』巻228）「隣家送魚鱉，問我数能来（隣家　魚鱉を送り，我に問いて数しば能く来たる）」，しばしば私の家に向かって魚やスッポンを送ることをいう。李益「送賈校書東帰寄振上人（賈校書の東帰するを送り振上人に寄す）」（『全唐詩』巻283）「為問[81]東州故人道，江淹已擬恵休詩（為めに東州の故人の道に問い，江淹　已に恵休の詩に擬す）」，「為問」は「為向」である。竇鞏[82]「自京師将赴黔南（京師より将に黔南に赴かんとす）」（『全唐詩』巻883）「風雨荊州二月天，問人初雇峡江船[83]（風雨　荊州　二月の天，人に問いて初めて雇う　峡江の船）」，「問人」は「向人」である。鮑溶[84]「送僧択棲遊天台（僧択棲の天台に遊ぶを送る）」二首其一（『全唐詩』巻487）「師問寄禅何処所，浙南青翠沃洲山（師は禅に寄りて何処の所に問わん，浙南　青翠　沃洲の山）」，師が何処に向かって禅を寄せるのかという意味。皮日休[85]「太湖詩・上真観」（『全唐詩』巻610）「儼対無霸陣，静問巌陵灘

（儼かに無霸の陣に対し，静かに巌陵の灘に問う）」，「向」は「対」と互文で，ひとしく「向」字の意味である。（有木）

15. 無端 wú duān

①無意識，無心。通常の「平白無敵（何の理由もない）」の意味とは別。韓愈「感春（春を感ず）」四首其四（『全唐詩』巻338）「帰来歓笑対妻子，衣食自給寧羞貧。今者無端読書史，智慧祇足労精神（帰り来たり　歓笑して妻子に対す，衣食は自ら給して寧ろ貧に羞ぢんや。今は端無く書史を読み，智慧は祇だ精神を労するに足れり）」，意味は功名を上げることの虚しさを見抜いたことによって，今では無心で書史を読むこと。白居易「翻経台」（『全唐詩』巻462）「一会霊山猶未散，重翻貝葉有来由。是名精進纔開眼，巌石無端亦点頭（一たび霊山に会して猶お未だ散せず，重ねて貝葉を翻して来由有り。是に精進を名として纔かに開眼すれば，巌石端無く亦た点頭す）」，意味は無心の岩石さえもうなずいて称賛することをいう。開眼とは，仏像が落成した後，吉日を選んで式典を挙行して正式に供奉すること。李商隠「錦瑟」（『全唐詩』巻539）「錦瑟無端五十弦，一弦一柱思華年（錦瑟　端無くも五十弦，一弦　一柱　華年を思う）」，これは錦瑟にある50本の弦はもともと無心であるが，人は瑟の上の弦を見れば歳月を生じやすく，去りやすいことの連想をいう。また「晋昌晩帰馬上贈（晋昌にて馬上に晩帰して贈る）」（『全唐詩』巻541）「人豈無端別，猿応有意衰[86]。征南予更遠，吟断望郷台（人は豈に端無くて別れん，猿は応に意有りて衰しむべし。南に征きて　予　更に遠く，望郷台を吟断す）」。陸亀蒙「寄懐華陽道士（懐いを華陽道士に寄す）」（『全唐詩』巻626）「銜煙細草無端緑，冒雨閑花作意香（煙を銜めば細草　端無くて緑なり，雨を冒せば閑花　意を作して香る）」。

②料らず，妨げず。事が意外に出ること。杜甫「歴歴」（『全唐詩』巻230）「歴歴開元事，分明在眼前。無端盗賊起，忽已歳時遷（歴歴たり開元の事，分明にして眼前に在り。端る無くも盗賊起こり，忽ち已に歳時遷る）」，仇兆鰲（『杜詩詳注』巻17）は「天宝之乱，皆明皇失徳所致，此云‘無端盗賊起’蓋諱言之耳（天宝の乱，皆な明皇の徳の致す所を失い，此れ‘端る無くも盗賊起こる’と云い　蓋し之を諱言するのみ）」と注し，仇注は盗賊が起こるには原因があることで，また「無端」の何の理由もないという意味との矛盾を感じ，ただ「諱言」をもって解釈するほうが好いと見る。実際，ここの「無端」の語は慌ただしい変化と意外なことを表し，料らず，妨げずをいい，「為尊者諱（尊い者にはばかられる）」ことではない。韓愈「遊城南（城南に遊ぶ）十六首・落花」（『全唐詩』巻343）「已分将身著地飛，那羞践踏損光暉。無端又被春風誤，吹落西家不得帰（已に身を将て地に著いて飛ぶを分とす，那ぞ羞ぢん　践踏して光暉を損するを。端る無くも　又た春風に誤られ，西家に吹き落されて帰るを得ず）」，「無端」は「已分」と対応し，料らず，妨げずの意味とする。王表[87]「成徳楽」（『全唐詩』巻281）「趙女乗春上画楼，一声歌発満城秋。無端更唱関山曲，不是征人亦涙流（趙女　春に乗じて画楼に上り，一声の歌発す　満城の秋。端る無くも更に関山の曲を唱し，是れ征人ならざるも亦た涙流る）」。張祜[88]「楊花」（『全唐詩』巻511）「散乱随風処処匂，庭前幾日雪花新。無端惹著潘郎鬢，驚殺緑窓紅粉人（散乱して風に随い　処処に匂し，庭前　幾日か雪花　新たなり。端る無くも潘郎の鬢に惹著し，驚殺す　緑窓紅粉の人）」。薛涌[89]「十離詩・犬離主（犬　主を離る）」（『全唐詩』巻803）「馴擾朱門四五年，毛香足浄主人憐。無端咬著親情客，不得紅絲毯上眠（朱門に馴擾せらるること四五年，毛香り　足浄く主人憐れむ。端る無くも親情の客を咬著し，紅絲の毯上に眠ることを得ず）」。

③いかんともするなし。多くは願いと異なる事に感嘆する場合に用いる。李嘉祐「過鳥公山寄銭起員外（鳥公山を過ぎて銭起員外に寄す）」（『全唐詩』巻207）「雨過青山猿叫時，愁人涙点石榴枝。無端王事還相繫，腸断蒹葭君不知（雨は青山を過ぎて　猿叫ぶ時，愁人　涙は石榴枝に点ず。端ともする無し　王事　還た相い繫がり，腸断す　蒹葭の君知らざるを）」，これは王事が繫がって会えないことがどうしようもないことをいい，「王事相繫」は相手を思っても会えない原因である。張籍[90]「使行望悟真寺（使いして悟真寺に行望す）」（『全唐詩』巻386）「無端来去騎官馬，寸歩教身不得遊（端ともする無く来去す　騎官の馬，寸歩　身をして遊ぶを得ざらしむ）」。賈島[91]「渡桑乾（桑乾を渡る）」（『全唐詩』巻574）「客舎并州已十霜，帰心日夜憶咸陽。無端更渡桑乾水，却望并州是故郷（并州に客舎して已に十霜，帰心　日夜　咸陽を憶う。端ともする無く更に渡る　桑乾の水，却って并州を望めば是れ故郷）」。薛能「登城（城に登る）」（『全唐詩』巻561）「偶作閑身上古

城，路人遥望不相驚。無端将吏逡巡至，又作都頭一隊行（偶ま閑身を作す　上古の城，路人　遥かに望みて相い驚かず。端ともする無し　将吏　逡巡して至り，又た都頭の一隊行を作すを）」。羅鄴[92]「早行」（『全唐詩』巻665）「雨灑江声風又吹，扁舟正与睡相宜。無端戍鼓催前去，別却青山向暁時（雨は江声に灑ぎ　風又た吹き，扁舟　正に睡相と宜し。端ともする無し　戍鼓　前去を催し，青山に別却す　向暁の時）」。（有木）

16. 無何 wú hé

上古の漢語の中に，「無何」は普段「無敵」「無事」「不久」等の意味が見慣れており，具体的には諸々の専門書と辞書に見える。唐宋に降って，「無何」はこの他になお「無奈」の意味を表すことができる。王昌齢[93]「鄭県宿陶太公館中贈馮六元二（鄭県の陶太公の館中に宿して馮六・元二に贈る）」（『全唐詩』巻140）「本家藍田下，非為漁弋故。無何困躬耕，且欲馳永路（本と藍田の下に家し，漁弋の為めの故に非ず。何も無くして躬耕に困しみ，且つ永路に馳せんと欲す）」。意味はどうしようもなく生計が逼迫し，長い道のりを奔走しなければならないこと。「何」はあるいは「才」に作るのは，この意味を知らずにでたらめに改めたに違いない。白居易「新楽府・新豊折臂翁（新豊の折臂翁）」（『全唐詩』巻426）「翁云貫属新豊県，生逢聖代無征戦。慣聴梨園歌管声，不識旗槍与弓箭。無何天宝大征兵[94]，戸有三丁点一丁（翁云う　貫は新豊県に属し，生まれて聖代に逢い　征戦無し。慣れて聴く　梨園の歌管の声，旗槍と弓箭とを識らず。何も無くして天宝に大いに兵を征し，戸に三丁有れば一丁を点ず）」，詩中の「天宝」二字ははっきりと時間を示し，「無何」は前文を承けて語気を転換させ，意外なことを表し，本当にやむを得ないこと。あるいは「不久」と解釈すれば，語意は冗長となり，語気がバラバラになる弊害がある。また，杜荀鶴「懐廬嶽書斉（廬嶽の書斉を懐う）」（『全唐詩』巻691）「是境皆遊遍，誰人不羨閑。無何一名繫，引出白雲間（是の境　皆な遊遍し，誰が人か閑を羨まず。何も無くして一名を繫ぎ，白雲の間に引出す）」，下文に「一名繫」といえば，「無何」は「無敵」と解釈することができない。「無何」のこの意味は詩詞中に根拠なく見え，同時代の散文に証明される。『太平広記』巻286「画工」[95]は「聞奇録」を引いて「剣纔及顔室，真真乃泣曰：‘妾南岳地仙也，無何為人画妾之形，君又呼妾名，既不奪君願。君今疑妾，妾不可住’（剣　纔かに顔室に及び，真真　乃ち泣きて曰く：‘妾は南岳の地仙なり，何も無くして人に妾の形を画かれ，君　又た妾の名を呼び，既に君の願いを奪わず。君　今　妾を疑い，妾は住すべからず’と）」，また巻183「房翊」[96]は「摭言」を引いて「房翊，河南人，太尉之孫，咸通四年垂成而敗。先是名第定矣，無何写試之際，仰泥土落，撃翻硯瓦，汚試紙（房翊は，河南の人なり，太尉の孫，咸通四年　垂んとして成して敗す。先ず是れ名第定まり，何も無くも写試の際，泥土の落つるを仰ぎ，撃ちて硯瓦を翻し，試紙を汚す）」。『夷堅志』三補[97]「負御容赴水死（御容を負いて水に赴きて死す）」「及至城陥，（王）稟引疲乏之兵欲出西門，無何西門挿板索断，不能出（城の陥つるに至るに及び，稟　疲乏の兵を引きて西門を出でんと欲し，何も無くして西門に板を挿して索断せば，出づる能わず）」，これも意外なことが起こりどうしようもないの意味を表し，均しく佐証できる。（有木）

17. 惜 xī

①遠慮する，お断りする，常に酒を拒むことを指す。孟浩然「清明日宴梅道士房（清明日に梅道士房を宴す）」（『全唐詩』巻160）「童顔若可駐，何惜酔流霞（童顔　若し駐むべくんば，何ぞ惜まん　流霞に酔うを）」。どうして一酔することを遠慮するのか（遠慮しないでください），の意である。成彦雄[98]「除夜」（『全唐詩』巻759）「銅竜[99]看却送春来，莫惜癲狂酒百杯（銅竜看却す　春を送り来たるを，癲狂にして酒百杯を惜む莫かれ）」。以上の例では，「惜」は「莫」などの否定詞と連用する。酒を勧める際に，相手に対して遠慮しないでほしいことを伝える。

②辞退する。酒を拒む意に限らない。白居易「売炭翁」（『全唐詩』巻427）「一車炭重千余斤，宮使駆将惜不得（一車の炭　重さ千余斤，宮使の駆将　惜むを得ず）」。つまり宮中の使者からの命令を拒むことができないという意である。『唐詩三百首』巻6杜秋娘[100]「金縷衣」（『全唐詩』巻28）「勧君莫惜金縷衣，勧君惜取少年時（君に勧む　金縷衣を惜む莫かれと，君に勧む　少年の時を惜取せよと）」。題名と詩中の「金縷衣」の意

味は一致している。両方とも曲名で，楽府の近代曲辞に属す。杜秋娘はこの曲を歌うのが上手で有名になったと伝えられている。この句の中の二つの「惜」字は，前後の解釈が違う。「莫惜（惜しむ莫かれ）」は「勿拒（拒む勿れ）」，「休辞（辞するを休めよ）」と同じ，「惜取（取るを惜しめ）」は「愛惜」と同じである。

③恐れる，心配する。李白「感興」（『全唐詩』巻183）「裂素[101]持作書，将寄万里懐……委之在深篋[102]，蠹魚[103]壊其題。何如投水中，流落他人開。不惜他人開，但恐生是非（裂素 持ちて書を作し，将って万里の懐を寄す……これを委ねて深篋に在らば，蠹魚　その題を壊す。何如ぞ　水中に投げ，流落せしめて他人に開かすを。他人に開かすを惜れず，但だ是非生ずるを恐るるのみ）」。「惜」と「恐」は対の形になっている。つまり，私は知らない誰かが私の手紙を開いて読むことは怖くないが，ただこれによって紛糾を招くことを心配しているだけだという。崔国輔[104]「香風詞」（『全唐詩』巻119）「坐惜玉楼春欲尽，紅棉粉絮裛[105]妝啼（坐ろに惜る玉楼の春尽きんと欲するを，紅綿粉絮　妝を裛して啼く）」。『全唐詩』では「坐惜」に作り，『万首絶句選』では「坐恐」に作る。李白「早秋贈裴十七（早秋裴十七に贈る）」（『全唐詩』巻168）「双歌入青雲，但惜白日斜（双歌青雲に入り，但だ白日の斜くを惜るるのみ）」。日暮れを恐れるということ。（梁）

18. 下 xià

時間を示す。方向を示さない。「当時」の意味を示すことができる。孟浩然「上巳洛中寄王九迥（上巳に洛中の王九迥に寄す）」（『全唐詩』巻160）「卜洛成周地，浮杯上巳筵。闘鶏寒食下，走馬射堂前（卜洛[106]して周地を成し，杯を浮かぶ[107]　上巳の筵。鶏を闘わす 寒食の下，馬を走らす　射堂[108]の前）」。「食下」は，寒食の際，寒食の時，寒食の日の意。（梁）

19. 先 xiān

①「本」と同じ，すでに。去声に読む。杜甫「解悶」十二首其十一（『全唐詩』巻230）「翠瓜碧李沈玉甃[109]，赤梨葡萄寒露成。可憐先不異枝蔓，此物娟娟長遠生（翠瓜碧李　玉甃に沈められ，赤梨葡萄　寒露に成る。憐むべし　先枝蔓と異ならざるを，此の物娟娟として長遠にして生ず）」。この句は荔枝のことを詠んでいる。荔枝の枝とつるはもとより瓜，李などの果物の枝とつると異なるところがないが，僻遠の地で生まれたものとして寵愛されている。趙嘏[110]「端午春樹（端午の春樹）」（『全唐詩』巻550）「一樹繁陰先著名，異花奇葉儼天成（一樹の繁陰　先著名にして，異花奇葉　儼かに天成す）」。「先著名」は，もとより著名である，また早くからすでに著名であることをいう。

②「先生」の略称。『史記』巻101晁錯伝「学申商[111]刑名於軹[112]張恢先所（申，商の刑名を軹の張恢先の所に学ぶ）」。裴駰の『集解』に徐広の説を引用して「先即先生（先即ち先生なり）」と解説する。『漢書』巻67梅福伝「夫叔孫先非不忠也（夫れ叔孫先は不忠に非ざるなり）」。顔師古注「先，猶言先生也（先は猶お先生をいうなり）」。また，『史記』晁錯伝の中に「鄧公」とあるが，『漢書』には「鄧生」と記した。（梁）

20. 先自 xiānzì

「本自（もとより）」，「已自（すでに自ずから）」と同じ。上官婉児[113]「遊長寧公主流杯[114]池（長寧公主の流杯池に遊ぶ）」（『全唐詩』巻5）「沁水田園先自多，斉城楼観更無過（沁水田園　先より自ずから多し，斉城楼観　更に過ぐること無し）」。（梁）

21. 閑 xián

空と同じ，平常，関わらない。李白「春日独酌（春日独酌す）」（『全唐詩』巻182）「思対一壺酒，淡然万事閑（思う　一壺の酒に対し，淡然として万事閑なり）」。ここの「閑」は平常の意。また，平常というのは大し

たことではないという意味をもつ。岑参「喜韓樽相過（韓樽の相い過るを喜ぶ）」（『全唐詩』巻199）「与君兄弟日携手，世上虚名好是閑（君と兄弟のごとく日に手を携え，世上の虚名　好に是れ閑なり）」。また，「暮春虢州[115]送李司馬（暮春に虢州にて李司馬を送る）」（『全唐詩』巻201）「簾前春色応須惜，世上浮名好是閑（簾前の春色応に須らく惜しむべし，世上の浮名好に是れ閑なり）」。以上の「閑」は，みな平常，大したことではない，の意である。白居易「南浦歳晩対酒送王十五帰京（南浦にて歳晩に酒に対して王十五の京に帰るを送る）」『全唐詩』巻493）「相看漸老無過酔，聚散窮通[116]総是閑（相い看る　漸く老いて酔うに過ぐること無し，聚散窮通　総て是れ閑なり）」。意は前と同じ。羅隠「韋公子」（『全唐詩』巻664）「李将軍自嘉声在，不得封侯亦是閑（李将軍自ずから嘉声在り，封侯を得ざるも亦た是れ閑なり）」。意は前と同じ。諸侯に封ずることは大したことではない。呉融[117]「武関」（『全唐詩』巻686）「貪生莫作千年計，到了都成一夢閑（生を貪れば千年の計を作る莫かれ，到り了わりて都て一夢の閑と成る）」。ここの「閑」は「空（むなし）」の意。白居易「自詠」（『全唐詩』巻455）「随分自安心自断，是非何用問閑人（分に随いて自ら安じて心自ら断じ，是非は何を用て閑人に問わん）」。ここの「閑人」は無関係な人を指す。また「閑臥」（『全唐詩』巻455）「仏容為弟子，天許作閑人（仏　弟子と為るを容し，天　閑人と作るを許す）」。「閑人」は暇な人をいう。劉禹錫[118]「贈李司空妓（李司空の妓に贈る）」（『全唐詩』巻365」「司空見慣渾閑事，断尽蘇州刺史腸（司空見慣[119]　渾て閑事なり，断ち尽くす　蘇州刺史の腸を）」。「閑事」は平常の事を指す。張祜[120]「楽静（静を楽しむ）」（『全唐詩』巻）510）「遠心群野鶴，閑話対村人（遠心野鶴と群れ，閑話村人に対す）」，韋荘「辺上逢薛秀才話旧（辺上に薛秀才と逢いて旧を話す）」（『全唐詩』巻700）「前年同酔武陵亭，絶倒閑譚坐到明（前年同に武陵亭に酔い，絶倒して閑譚し　坐ろに明に到る）」。大体閑話，閑譚，閑言というと，無関係な話の意である。また空談と同じ。（梁）

22. 賢 xián

第二人称の敬称，つまり君あるいは公の意。蘇軾「李行中酔眠亭」（『東坡詩集注』[121]巻9）「君且帰休我欲眠，人言此語出天然。酔中対客眠何害，須信陶潜未若賢（君且く帰りて休め　我眠らんと欲す，人は言う　此の語天然より出づと。酔中客に対して眠るは何の害ある，須く信ずるべし　陶潜未だ賢に若かざるを）」。この句は陶潜の「我酔欲眠卿可去（我酔いて眠らんと欲す　卿去るべし）」句（『陶淵明集』[122]巻10）を借りて翻案した。（梁）

23. 相将 xiāngjiāng

①「相与（相いともに）」，「相共（相いともに）」と同じ。孟浩然「春情」（『全唐詩』巻160）「已厭交歓憐枕席，相将游戯繞池台（已に交歓に厭き　枕席を憐れ，相将に游戯し　池台を繞る）」。令狐楚「春游曲」（『全唐詩』巻23）「相将折楊柳，争取最長条（相将に楊柳を折り，争いて最も長き条を取る）」。李賀「官街鼓」（『全唐詩』巻393）「幾回天上葬神仙，漏声相将無断絶（幾回か　天上　神仙を葬り，漏声相将いて断絶無し）」。王琦の注に「将猶随也（将は猶お随うのごとし）」とある。

②「行将（まもなく……しようとしている）」，「侵尋（じわじわと深くはいりこむ）」と同じ。（梁）

24. 想 xiǎng

動詞，……と似ている，……のようだ。「思想」と「予想」の意ではない。李白「清平調」（『全唐詩』巻27）「雲想衣裳花想容，春風払欄露華濃（雲は衣裳の想く　花は容の想く，春風欄を払い　露華濃やかなり）」。つまり「衣裳は雲のようで，容貌は花のようである。」ということ。杜甫「東屯月夜（東屯の月夜）」（『全唐詩』巻229）「数驚聞雀噪[123]，暫睡想猿蹲（数しば驚く　雀噪を聞き，暫く睡る　猿蹲[124]の想し）」。これは「猿がうずくまるようだ。」。高適[125]「同薛司直諸公秋霽曲江俯見南山（薛司直諸公と同に秋霽の曲江に南山を俯見す）」（『全唐詩』巻212）「南山鬱初霽，曲江湛不流。若臨瑶池前，想望昆侖丘（南山　鬱として初めて霽れ，

曲江　湛として流れず。瑶池の前に臨むが若く，昆侖の丘を望むが想し)」。韓愈「詠雪贈張籍[126]（雪を詠みて張籍に贈る)」(『全唐詩』巻343)「磧迴疑浮地，雲平想輾雷（磧　迴にして浮地の疑く，雲　平かにして輾雷の想し)」。李紳[127]「題法華寺（法華寺に題す)」(『全唐詩』巻481)「竜噴疑通海，鯨呑想漏川（竜噴　通海の疑く，鯨呑　漏川の想し)」。作者の自注に「寺内に梁朝の銅竜有りて水を吐く，銅鯨ありて水を飲む，以て諸院に注ぐ。」とある。姚合[128]「奉和門下相公雨中寄裴給事（門下相公雨中に裴給事に寄すに奉和す)」(『全唐詩』巻501)「暁起閑看雨，垂檐自滴階。風清想林壑，雲湿似江淮（暁に起きて　閑として雨を看，檐より垂れて自ずから階に滴る。風　清くして林壑の想く，雲　湿いて江淮の似し)」。李遠[129]「呉越懐古」(『全唐詩』巻519)「霞払故城疑転旆[130]，月依荒樹想嚬蛾[131]（霞　故城を払い　転旆の疑く，月　荒樹に依りて　嚬蛾の想し)」。李頻[132]「府試観蘭亭図（府試　蘭亭図を観る)」(『全唐詩』巻589)「筆想吟中駐，杯疑飲後乾（筆吟ずる中に駐むるが想く，杯　飲む後に乾きが疑し)」。

㊔「想」をもって「似」,「如」,「像」の意を示すのは「同音仮借」（同じ発音の当て字）の現象である。『広韻』によると,「想」と「像」いずれも上声の養韻に記されている。「想」は「惜両の切[133]」，像は「余両の切」であるため，音調も韻母（母音）もみな同じである。二者は声母（子音）の間に僅かな差があるだけである。「想」の声母は心で,「像」の声母は邪であるが，いずれもいわゆる歯音（舌先を用いて調音される破擦音）である。そのため，両者は通用できる。以上のように，この現象は「同音仮借」という理由によるほか，漢詩詞の中に常に使われている「借対」[134]という修辞の技法に関わる場合もある。（梁）

25. 想像xiǎngxiàng

彷佛する，動詞（似ている，そっくりである)，または副詞（あたかも……のようだ，まるで)。「想像」の用例は早期の仏経ですでに見える。後漢の支婁迦讖訳の『道行般若経』巻九「薩陀波倫菩薩品」に「仏亦如是，想像本無所従来，去亦無所至（仏も亦た是の如く，本より従い来たるところ無く，去るも亦た至るところも無きが想像し)」とある。杜甫「詠懐古跡（古跡を詠懐す)」(『全唐詩』巻230)「翠華想像空山裏，玉殿虚無野寺中（翠華　空山の裏にあるが想像く，玉殿　虚無なり　野寺の中)」。この句の意味は，空山の中に先主劉備の仗旗がまだ残っているということである。李白「贈張相鎬（張相鎬に贈る)」(『全唐詩』巻170)「想像晋末時，崩騰胡塵起（晋末の時の想像く，崩騰して胡塵起つ)」。李白が晩年に讒言を受け，また安史の乱に遭ったという。当時の社会が混乱していて，晋末に戻ったようである。また「淮海対雪（淮海雪に対す)」(『全唐詩』巻168)「飄揺四荒外，想像千花発（四荒の外の飄颻く，千花発くが想像し)」。また,「遊泰山（泰山に遊ぶ)」六首其六（『全唐詩』巻179)「想像鸞鳳舞，飄颻竜虎衣（鸞鳳の舞の想像く，竜虎の衣の飄颻し)」。柳宗元「界囲岩水簾（界囲岩の水簾)」(『全唐詩』巻351)「丹霞冠其巓，想像凌虚游（丹霞　其の巓を冠し，凌虚に遊するが想像し)」。ここの「想像」は動詞である。韋応物「鼋頭山神女歌（鼋頭山の神女歌)」(『全唐詩』巻195)「山精木魅不敢窺，昏明想像如有人（山は精として木は魅たり　敢えて窺わず，昏明として想像人有るが如し)」。ここの「想像」は副詞である。（梁）

26. 向xiàng

①指示の辞。程度，時間，方向，数量を示すことができる。また，向後，向前，向去，向上，向外，向下を見よ。

②語助詞,「怎奈」,「如何」などの言葉と組み合わせる。語気を強めるために語尾に付ける。また,「何向」「奈向」「如何向」「無計向」「怎向」「争奈向」「争向」を見よ。

③推定の副詞,「可（ほぼ，だいたい)」に同じ。杜甫「蚕穀行」(『全唐詩』巻221)「天下郡国向万城，無有一城無甲兵（天下の郡国　向万城，一城として甲兵無きこと有る無し)」。また,「投簡咸華両県諸子（咸華両県の諸子に投簡す)」(『全唐詩』巻219)「飢臥[135]動即[136]向一旬，敝衣何啻[137]連百結[138]（飢臥　動けば即ち向一旬，敝衣　何ぞ啻に百結を連ねるのみならん)」。また,「詠懐」(『全唐詩』巻223)「倏忽向二紀，奸雄多是

非（倏忽として向二紀，奸雄は是非多し）」。「向万城」は「可万城」。「向一旬」は「可一旬」。「向二紀」は「可二紀」。さらに，杜甫以外の詩の用例も挙げる。例も取り上げてみよう。沈佺期[139]「初達驩州（初めて驩州に達す）」（『全唐詩』巻223）「自昔聞銅柱，行来向一年（昔より銅柱を聞き，行き来たりて向一年）」。王維「輞川別業（輞川の別業）」（『全唐詩』巻96）「不到東山向一年，帰来才及種春田（東山に到らざること向一年，帰り来たる　才も春田を種うるに及ぶ）」。李白「寄東魯二稚子（東魯の二稚子に寄す）」（『全唐詩』巻128）「此樹我所種，別来向三年（此の樹　我が種うる所なり，別れ来たる　向三年）」。裴迪[140]「感化寺」（『全唐詩』巻172）「不遠灞陵辺，安居向十年（遠からざる灞陵の辺，安らかに居る　向十年）」。元結[141]「喩旧部曲（旧部に喩す曲）」（『全唐詩』巻129）「兵興向十年，所見堪嘆哭（兵の興ること　向十年，見る所は嘆哭するに堪う）」。また，「酬孟武昌[142]苦雪（孟武昌の雪に苦しむに酬す）」（『全唐詩』巻241）「兵興向九歳，稼穡誰能憂（兵の興ること　向九年，稼穡は誰か能く憂えん）」。以上の「向」は，みな推定の助詞，「可」字とほぼ同じ。

④「与」に同じ。介詞として使う場合が多い。また，たまに接続詞として使う場合もある。白居易「老慵」（『全唐詩』巻241）「豈是交親向[143]我疎，老慵自愛閉門居（豈に是れ交親は我向疎しや，老慵自ら愛す　門を閉ざして居る）」。また，「哭師皋[144]（師の皋を哭す）」（『全唐詩』巻451）「平生分義向人尽，今日哀冤唯我知（平生の分義　人向尽くす，今日の哀冤　唯だ我のみ知る）」。以上の二例は，「与我疎（我と疎し）」と「尽与人（尽く人と与にす）」に同じ，「尽」字は平仄の関係で後に置く。杜荀鶴「題唐興寺小松（唐興寺の小松を題す）」（『全唐詩』巻691）「雖小天然別，難将衆木同。侵僧半窓月，向客満襟風（小なると雖も天然と別なり，衆木を将って同じくし難し。僧の半窓の月を侵し，客の満襟の風と向にす）」。「向」一に「与」に作り，「向客」はつまり「与客」と同じ。王諲[145]「十五夜観灯（十五夜に灯を観る）」（『全唐詩』巻145）「妓雑歌偏勝，場移舞更新。応須尽記取，説向不来人（妓雑われば歌は偏に勝る，場 移れば舞は更に新たにす。応に須らく尽く記取し，来たざる人向説くべし）」。「向」は他の版本では「与」に作る。「説向」はつまり「説与（……対して説明する）」に同じ。喩鳧[146]「得子姪書（子姪の書を得たり）」（『全唐詩』巻543）「雁天霞脚[147]雨，漁夜葦条風。無復琴杯興，開懐向尓同（雁天　霞脚の雨，漁夜　葦条の風。復た琴杯の興無くんば，開懐は尓向同じ）」。高瞻[148]「宮詞」（『全唐詩』巻668）「君恩秋後葉，日日向人疎（君恩は秋後の葉のごとく，日日に人向疎し）」。李建勲[149]「道林寺」（『全唐詩』巻739）「雖向鍾峰数寺連，就中奇勝出其間（鍾峰の数寺向連ねると雖も，就中奇勝其の間に出づ）」。意味はすべて前に同じ。于濆[150]「田翁嘆（田翁の嘆き）」（『全唐詩』巻599）「帰来説向家，児孫竟咨嗟（帰り来たりて　家向説う，児孫は竟咨嗟す）」。杜寛[151]「寄省中知己（省中の知己に寄す）」（『全唐詩』巻606）「毎憐吾道苦，常説向同仁（毎に吾が道の苦しきを憐れみ，常に同仁向説く）」。崔塗「秋宿天彭僧寺（秋に天彭僧の寺に宿る）」（『全唐詩』巻679）「難将塵界事，話向雪山僧（塵界事を将て，雪山の僧向話し難し）」。李洞[152]「和淮南太尉留題鳳州王氏別業（淮南太尉の鳳州王氏の別業を留題するに和す）」（『全唐詩』巻723）「清秋看長[153]鷺雛成，説向湘僧亦動情（清秋に看長す　鷺雛成る，湘僧向説くも亦た情を動かす）」。以上の「説向」「話向」はすべて「説与」に同じ。司空曙[154]「秋日呈尹植裴説（秋日に尹植裴に説を呈す）」（『全唐詩』巻292）「静向懶相偶，年将衰共催（静は懶向相い偶し，年は衰将共に催す）」。ここの「向」は連詞，「将」と互文となっている。

⑤「在」の意。介詞として使う場合が多く，その後に場所を表す名詞を記し，ある所にある意を示す崔曙[155]「登水門楼見亡友張貞期題望黄河詩因以感興（水門楼に登り　亡友の張貞期の黄河を望むを題する詩を見　因りて以て感興す）」（『全唐詩』巻165）「人随川上逝，書向壁中留（人は川の上に随いて逝き，書は壁の中に向りて留む）」。「向」一に「在」に作り，「向壁中」はつまり「在壁中（壁中に在る）」の意。李嘉佑[156]「雑興」（『全唐詩』巻206）「花間昔日黄鸝囀，妾向青楼已生怨（花の間に昔日の黄鸝は囀り，妾は青楼に向りて已に怨みを生ず）」。杜甫「北征」（『全唐詩』巻217）「都人望翠華，佳気向金闕（都人は翠華を望み，佳気は金闕に向り）」。白居易「上陽人（上陽[157]の人）」（『全唐詩』巻426）「妬令潜配上陽宮，一生遂向空房宿（妬まれて潜かに上陽宮に配せしめ，一生　遂に空房に向りて宿る）」。

⑥「在」の意，介詞として使う場合が多く，その後に時間を表す名詞を綴り，ある時にある意を示す。

⑦もしも，もし…ならば，仮定の意を示す接続詞，つねに「非」，「無」，「不」などの否定語を伴う。杜甫「湖城東遇孟雲卿復帰劉顥宅宿宴飲散因為酔歌（湖城の東にて孟雲卿に遇う　復た劉顥の宅に帰りて宿宴す　飲散じて因りて為に酔う歌）」（『全唐詩』巻217）「向非劉顥為地主，懶回鞭轡成高宴（向し劉顥は地主為るに非ざれば，懶りて鞭轡を回して高宴を成す）」。「向非」は「若非」に同じ。高適「漣上題樊氏水亭（漣上にて樊氏の水亭を題す）」（『全唐詩』巻212）「向不逢此君，孤舟已言旋（向し此の君に逢わざれば，孤舟已に旋えるを言う）」。「此君」は水亭を指す。権徳輿[158]「豊城劍池駅感題（豊城劍池駅にて感じて題す）」（『全唐詩』巻325）「竜劍昔未発，泥沙隔晦蔵。向非張茂先，孰辨斗牛光（竜劍は昔より未だ発せず，泥沙に隔てられて晦蔵す。向し張茂先に非ざれば，孰か斗牛の光を辨ぜんや）」。ここは晋代の張華が天上の紫気を眺め，その後，豊亭の獄底で宝劍を得た典故を詠んでいる[159]。

⑧動詞，到る，往くの意。李白「憶東山（東山を憶う）」（『全唐詩』巻182）「不向東山久，薔薇幾度花（東山に向らざること久し，薔薇幾度の花）」。杜甫「詠懐古跡（古跡を詠懐す）」五首の四（『全唐詩』巻230）「蜀主征呉向三峡，崩年亦在永安宮（蜀主呉を征して三峡に向り，崩年も亦た永安宮に在り）」。白居易「早熱」（『全唐詩』巻458）「若為当此日，遷客向炎州（若為此の日に当たれば，客を遷して炎州に向く）」。それぞれの意は「到東山（東山に到る）」，「到三峡（三峡に到る）」，「往炎州（炎州に往く）」。李白の詩では「向」の直前に否定副詞としての「不」があり，白居易の詩の「向」は二つの名詞の間に位置するため，二首ともに「向」は動詞である。盧照隣[160]「江中望月（江中にて月を望む）」（『全唐詩』巻42）「江水向涔陽，澄澄写月光（江水は涔陽に向き，澄澄として月光を写す）」。「写」は「映」の意。「向」の意は上述の通り。

⑨「臨」に同じ，のぞむ。劉長卿[161]「月下呈張秀才（月下にて張秀才に呈す）」（『全唐詩』巻147）「向老三年謫，当秋百感多（老に向みて三年の謫，秋に当りて百感多し）」。「向老」は「臨老」の意。李群玉[162]「北亭」（『全唐詩』巻570）「荷花向尽秋光晩，零落残紅緑沼中（荷花は尽くるに向み　秋光晩し，零落す　残紅緑沼の中）」。「向尽」は「臨尽」の意。李商隠「楽遊原」（『全唐詩』巻539）「向晩意不適，駆車登草原（晩に向みて意に適わず，車を駆けて草原に登る）」。「向晩」は「臨晩（晩に臨む）」の意，または夕暮れの意。

⑩「愛」に同じ。（梁）

27. 何向héxiàng

「如何向」の略。徐陵[163]「報尹義尚書（尹義尚に報ずる書）」（『陳文紀』[164]巻7）「執筆潸然，不知何向（筆を執れば潸然たり，　何向なるを知らず）」。六朝の時にこの言葉はすでに存在した。向②を見よ。（梁）

28. 向後xiànghòu

①時間を示す。「以後」の意。白居易「青氈帳」（『白氏長慶集』巻71）「賓客於中接，児孫向後伝（賓客は中に於いて接け，児孫は向後に伝う）」。また「洛陽東花下作（洛陽東の花の下に作る）」（『全唐詩』巻446）「向後光陰促，従前事意忙（向後にして光陰は促し，前より事意は忙し）」。また「答山侶（山侶に答う）」（『全唐詩』巻442）「頷下髭須半是絲，光陰向後幾多時（頷下の髭須半ばは是れ絲なり，光陰は向後にして幾多の時）」。また「十二月二十三日」（『全唐詩』巻454）「案頭暦日雖未尽，向後惟残六七行（案頭の暦日　未だ尽かざると雖も，向後にして惟だ六七行のみを残す）」。皮日休[165]「奉酬魯望惜春見寄（魯望の春を惜しむに奉酬するに寄せらる）」（『全唐詩』巻613）「以前雖被愁将去，向後須教酒領来（以前は愁いを被りて将に去らんとすると雖も，向後は須らく酒を領して来たらしむべし）」。向①を見よ。

②過去の意。向①を見よ。（梁）

29. 向前 xiàngqián

①時間を示す。かつての意。白居易「琵琶行」（『全唐詩』巻435）「凄凄不似向前声，満座重聞皆掩泣（凄凄として向前の声に似かず，満座重ねて聞き　皆泣を掩う）」。許棠成「成紀[166]書事（成紀にて事を書す）」（『全唐詩』巻604）「難問開元向前事，依稀猶認隗囂宮（問い難し　開元の向前の事，依稀として猶お隗囂宮を認む）」。李山甫[167]「望思台[168]」（『全唐詩』巻643）「九層黄土是何物，銷得向前怨恨来（九層の黄土　是れ何物，向前の怨恨を銷し得て来たり）」。張安石[169]「苦別」（『全唐詩』巻771）「向前不信別離苦，而今自到別離処（向前は別離の苦しみを信ぜず，而今は自ずから別離の処に到る）」。賈島[170]「逢博陵故人彭兵曹（博陵の故人の彭兵曹に逢う）」（『全唐詩』巻574）「別後解餐蓬蘽子[171]，向前未識牡丹花（別るる後に蓬蘽子を餐するを解し，向前は未だ牡丹花を識らず）」。向①を見よ。

②「以後」と解釈する場合もある。向①を見よ。（梁）

30. 向上 xiàngshàng

①「以上」の意，一般的には程度を示す，またこの意から「最上（最上級）」，あるいは「無上（至高）」の意を持つ。白居易「池上閑吟（池上にて閑吟す）」（『全唐詩』巻454）「幸逢尭舜無為日，得作羲皇向上人（幸いに尭舜に逢う　無為の日，羲皇　向上の人と作し得たり）」。陸希声[172]「緑雲亭」（『全唐詩』巻689）「羲皇向上何人到，永日時時弄素琴（羲皇は向上　何人到るか，永日　時時にして素琴を弄す）」向①を見よ。（梁）

31. 向使 xiàngshǐ

仮に，もし。杜甫「九成宮」（『全唐詩』巻217）「荒哉隋家帝，制此今頽朽。向使国不亡，焉為巨唐有（荒めるかな　隋家の帝，此れを制して今頽朽たり。向使国の亡ぶれば，焉んぞ巨唐の有と為らん）」。白居易「放言」（『全唐詩』巻438）「周公恐惧留言[173]日，王莽謙恭未簒時。向使当初身便死，一生真偽復誰知（周公 留言を恐惧する日，王莽 謙恭として未だ簒せざる時。向使当初にして身便ち死ねば，一生の真偽復た誰か知らんや）」。向⑦を見よ。（梁）

32. 向下 xiàngxià

方向を示す。すぐ下，まっすぐに落ちる。皮日休「女墳湖」（『全唐詩』巻615）「須知韓重相思骨，直在芙蓉向下消（須らく知るべし　韓重相思の骨，直ちに芙蓉の向下に在りて消ゆ）」。（梁）

33. 争向 zhēngxiàng

「怎奈（いかん）」あるいは「奈何（いかん）」の意。白居易「題酒瓮呈夢得（酒瓮を題して夢得に呈す）」（『全唐詩』巻456）「若無清酒両三瓮，争向白須千万茎（若し清酒　両三瓮無ければ，争向ぞ　白須千万茎）」。王建「酬趙侍御（趙侍御を酬す）」（『全唐詩』巻301）「別来衣馬従勝旧，争向辺塵満白頭（別れ来たり　衣馬従旧に勝る，争向ぞ　辺塵に白頭満つ）」。また「贈別荊南李肇（荊南の李肇を贈別す）」（『全唐詩』巻297）「争向巴山夜，猿声満碧雲（争向ぞ巴山の夜，猿声　碧雲に満つ）」。（梁）

34. 暫 zàn

①「且（しばらく，まあとりあえず）」と同様。李白「月下独酌四首」其一（『全唐詩』巻182）「暫伴月将影，行楽須及春（暫く月と影とを伴いて，行楽須らく春に及ぶべし）」，「暫伴月将影」は「且伴月与影（且らく月と影とを伴いて）」と同様。李端[174]「江上逢司空曙（江上にて司空曙に逢う）」（『全唐詩』巻285）「唯当

執杯酒，暫食漢江魚（唯だ当に杯酒を執るべし，暫く漢江の魚を食らわん）」，「暫食」は「且食」である。韓愈「戯題牡丹（戯れに牡丹に題す）」（『全唐詩』巻343）「長年是事皆抛尽，今日欄辺暫眼明（長年 是の事 抛ち尽くし，今日 欄辺 暫く眼明らかなり）」，「暫眼明」は「且眼明」である。劉禹錫「酬楽天揚州初逢席上見贈（楽天の揚州に初めて席上に逢いて贈らるるに酬ゆ）」（『全唐詩』巻360）「今日聴君歌一曲，暫憑杯酒長精神（今日君の歌一曲を聴き，暫く杯酒に憑りて精神を長からしめん）」，「暫憑」は「且憑」である。張籍「早春閑遊」（『全唐詩』巻384）「遥聞有花発，騎馬暫行看（遥かに聞く 花の発く有りと，馬に騎りて暫く行きて看ん）」，「暫行看」は「且行看」である。項斯[175]「辺遊」（『全唐詩』巻554）「防秋故郷卒，暫喜語音同（防秋 故郷に卒わり，暫く喜ぶ 語音の同じきを）」，「暫喜」は「且喜」である。李商隠「寄和水部馬郎中題興得駅時昭義已平（水部馬郎中の興得駅に題するに寄せ和す 時に昭義 已に平らぐ）」[176]（『全唐詩』巻541）「仙郎倦去心，鄭駅蹔登臨[177]（仙郎 去心に倦み，鄭駅 蹔く登臨す）」，「蹔」は「暫」に同じ。「且登臨」というのである。

②「初」「才」「剛」（やっと，ようやく，せいぜい）と同様。李益「来従竇車騎行（竇車騎に来り従うの行）」（『全唐詩』巻282）「読書良不武，学剣暫非智[178]（読書は良に武ならず，学剣は暫めて智に非ず）」，「暫非智」は「初非智」と同様。李益[179]「宿石邑山中」（『全唐詩』巻283）「暁月暫飛千樹裏，秋河隔在数峰西（暁月 暫めて飛ぶ千樹の裏，秋河 隔てて在り数峰の西）」，「暫飛」は「初昇（初めて昇る）」と同じ。夜明けの月がようやく昇ったばかり，銀河はもはや遠くに沈もうとしている，と言うのである。銭起[180]「送楊著作帰東海（楊著作の東海に帰るを送る）」（『全唐詩』巻239）「酒酣暫軽別，路遠始相思（酒酣にして暫めて別れを軽んずるも，路遠くして始めて相思す）」，「暫軽別」とは「初不以別為意（初めて別れを以て意と為さず）」の意であり，「始」字と対をなす。何遜[181]「詠七夕（七夕を詠ず）」（『玉台新詠』巻五）「来歓暫巧笑，還涙已啼妝（来歓暫めて巧笑するも，還涙 已に啼妝[182]）」，「暫巧笑」は「才巧笑」と同じであり，「已」字と対応する。白居易「和高僕射罷節度譲尚書授少保分司喜遂遊山水之作（高僕射の節度を罷め尚書を譲り少保分司を授けられ喜びて遂に山水に遊ぶの作に和す）」（『全唐詩』巻454）「蹔[183]辞八座罷双旌[184]，便作登山臨水行（蹔めて八座を辞して双旌を罷め，便ち登山臨水の行を作す）」，「蹔」は「暫」に同じ。「蹔辞」は「才辞」と同じ。韓愈「秋懐詩十首」其二（『全唐詩』巻336）「寒蝉暫寂寞，蟋蟀鳴自恣（寒蝉 暫めて寂寞として，蟋蟀鳴いて自ら恣にす）」，「暫寂寞」は「才寂寞」と同様。

③「忽」「頓」「便」（たちまち，にわかに，すぐに）と同様。李白「東海有勇婦（東海に勇婦有り）」（『全唐詩』巻22・164）「金石忽暫開，都由激深情（金石忽暫ち開くは，都て激深の情に由る）」，「忽暫」は同義の字を組み合わせている。独孤及[185]「賈員外処見中書賈舎人巴陵詩集覧之懐旧代書寄贈（賈員外の処に中書賈舎人の巴陵詩集を見 之を覧じて懐旧し代書して寄せ贈る）」（『全唐詩』巻246）「暫若窺武庫，森然矛戟寒（暫若ち武庫を窺えば，森然として矛戟寒し）」，「暫若」は「忽若」と同様。韓愈「叉魚 招張功曹（叉魚 張功曹を招く）」（『全唐詩』巻343）「迷火逃翻近，驚人去暫遥（火に迷いて逃れて翻って近く，人に驚いて去って暫ち遥かなり）」，「暫遥」は「忽遠」と同様。韓愈「遠遊聯句」（『全唐詩』巻791）「魍魅暫出没，蛟螭互蟠蟉（魑魅暫ち出没し，蛟螭互いに蟠蟉す[186]）」，「暫出没」は「倏出没」と同様。「倏」も「忽」の意。韓愈「謝自然詩」（『全唐詩』巻336）「檐楹蹔明滅[187]，五色光属聯（檐楹蹔ち明滅し，五色 光 属聯す）」，「蹔」は「暫」に同じ。「蹔明滅」は「乍明滅」と同じ。「乍」も「忽」の意。以上は「忽」の意。

杜甫「晨雨」（『全唐詩』巻230）「暫起柴荊色，軽霑鳥獣群（暫ち起く 柴荊の色，軽く霑おす鳥獣の群）」，「暫起」は「頓起」と同じ。白居易「赴蘇州至常州答賈舎人（蘇州に赴き常州に至り賈舎人に答う）」（『全唐詩』巻447）「厭見簿書先眼合，喜逢杯酒暫眉開（簿書を見るに厭みて先に眼合し，杯酒に逢うを喜びて暫ち眉開く）」，「暫眉開」は「頓眉開」もしくは「便眉開」と同じ。劉禹錫「秋日題竇員外崇徳里新居（秋日竇員外の崇徳里新居に題す）」（『全唐詩』巻359）「長愛街西風景閑，到君居処暫開顔（長く愛す 街西風景の閑たるを，君が居処に到りて暫ち開顔す）」，「暫」は一に「便」に作り，「暫」は「便」である。「便開顔」というのである。以上は「頓」「便」の意。

④「偶」「適」（たまたま）と同様。李白「猛虎行」（『全唐詩』巻19・165）「張良未遇韓信貧，劉項存亡在両臣。暫[188]到下邳受兵略，来投漂母作主人（張良未だ遇わず 韓信貧す，劉項の存亡両臣に在り。暫たま下邳

に到りて兵略を受け，漂母に来投して主人と作す)」，「暫到」は「偶到」「適到」と同じ。李白「春陪商州裴使君遊石娥溪（春 商州裴使君の石娥溪に遊ぶに陪す)」(『全唐詩』巻179)「暫出東城辺，遂遊西巖前（暫たま出づ東城の辺，遂に遊ぶ西巖の前)」，「暫出」は「偶出」である。韓愈「遊城南十六首　出城」(『全唐詩』巻343)「暫出城門蹋青草，遠於林下見春山（暫たま城門を出でて青草を蹋み，遠く林下に於いて春山を見る)」，上に同じ。張籍「送令狐尚書赴東都留守（令狐尚書の東都留守に赴くを送る)」(『全唐詩』巻385)「行香暫出天橋上，巡礼常過禁殿中（行香[189]暫たま出づ天橋の上，巡礼常に過る禁殿の中)」，上に同じ。張籍「閑遊」(『全唐詩』巻386)「今朝暫共遊僧語，更恨趨時別旧山（今朝暫たま遊僧と共に語り，更に恨む趨時 旧山に別るるを)」，「暫共」は「偶共」「適共」と同様。王昌齢「武陵開元観黄錬師院（武陵の開元観黄錬師の院）三首」其三（『全唐詩』巻143)「暫因問俗到真境，便欲投誠依道源（暫たま俗を問うに因りて真境に到り，便ち誠に投ぜんと欲して道源に依る)」。寒山詩（『全唐詩』巻806)「儂家暫下山，入到城隍裏。逢見一群女，端正容貌美（儂家暫たま下山し，入りて城隍の裏に到る。逢い見る一群の女，端正にして容貌美なり)」，「暫下山」は「偶下山」である。韓偓「早発藍関（早に藍関を発す)」(『全唐詩』巻682)「路盤暫見樵人火，桟転時聞駅使鈴（路盤りて暫たま見る樵人の火，桟転じて時に聞く駅使の鈴)」「暫」は一に「偶」に作り，「暫」は「偶」である。李商隠「杏花」(『全唐詩』巻539)「上国昔相値，亭亭如欲言。異郷今暫賞，脈脈豈無恩（上国 昔 相値い，亭亭として言わんと欲するが如し。異郷 今暫たま賞す，脈脈として豈に恩無からん)」，「暫賞」は「適逢其会而欣賞（たまたまその機会を得てその花を愛でる)」というのである。「無恩」は「無情」と同様。李商隠「和劉評事永楽閑居見寄（劉評事の永楽閑居に寄せらるるに和す)」(『全唐詩』巻541)「白社幽閑君暫居，青雲器業我全疏（白社の幽閑 君暫たま居し，青雲の器業 我全く疏なり)」，「暫居」は「適逢其会而閑居（たまたまその機会を得て閑居する)」というのである。

⑤「一（ひとたび)」と同様。杜甫「人日両篇」其二（『全唐詩』巻232)「佩剣衝星聊暫抜，匣琴流水自須弾（佩剣星を衝くがごとく聊か暫たび抜き，匣琴流水のごとく自ら須らく弾ずべし)」，「暫抜」は「一抜」と同じ。「佩剣聊一抜（腰に帯びた剣をいちど抜いてみた)」というのである。杜甫「寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史参三十韻（彭州の高三十五使君適 虢州の岑二十七長史参に寄す三十韻)」(『全唐詩』巻225)「会待妖氛静，論文暫裹糧（会らず妖氛の静かなるを待ち，文を論ずるに暫たび糧を裹まん)」，「裹糧」は「啓行（出発の準備をする)」の意。「将為論文而一行（将に文を論ずる為に一たび行かんとす)」というのである。杜甫「曲江対雨二首」其二（『全唐詩』巻225)「何時詔此金銭会，暫酔佳人錦瑟旁（何れの時か此の金銭の会を詔して，暫たび酔わん 佳人錦瑟の旁ら)」，「暫酔」は「一酔」と同様。韓愈「奉和裴相公東征途経女几山下作（裴相公の東征の途に女几山の下を経るの作に和し奉る)」(『全唐詩』巻344)「敢請相公平賊後，暫携諸吏上崢嶸（敢えて請う相公賊を平らぐるの後，暫たび諸吏を携えて崢嶸に上らん)」，「暫携」は「一携」と同様。李賀[190]「南園十三首」其五（『全唐詩』巻390)「請君暫上凌煙閣，若箇書生万戸侯（君に請う暫たび上れ凌煙閣，若箇の書生か万戸侯たる)」，「暫上」は「一上」と同じ。白居易「答張籍因以代書（張籍に答うるに因りて以て代書す)」(『全唐詩』巻437)「今日正閑天又暖，可能扶病暫来無（今日正に閑として天又暖かなり，能く病を扶けて暫たび来るべきや無や)」，「可能一来否（能く一たび来るべきや否や)」というのである。白居易「聞微之江陵臥病以大通中散碧腴垂雲膏寄之因題四韻（微之の江陵に病に臥すを聞き大通中散碧腴垂雲膏を以て之を寄せ因りて題す四韻)」(『全唐詩』巻437)「到時想得君拈得，枕上開看眼暫明（到る時想い得たり 君の拈り得て，枕上開き看て眼暫たび明らかならんことを)」。白居易「琵琶行」(『全唐詩』巻435)「豈無山歌与村笛，嘔啞嘲哳難為聴。今夜聞君琵琶語，如聴仙楽耳暫明（豈に無からん 山歌と村笛と，嘔啞嘲哳聴を為し難し。今夜君が琵琶の語を聞き，仙楽を聴くが如く耳暫たび明らかなり)」，「耳為之一爽（耳之が為に一たび爽たり)」というのである。白居易「聴李士良琵琶（李士良の琵琶を聴く)」(『全唐詩』巻439)「閑人暫聴猶眉斂，可使和蕃公主聞（閑人すら暫たび聞きて猶お眉斂む，和蕃公主[191]をして聞かしむべけんや)」。(長谷川)

35. 早是 zǎoshì

①「本是（もともと)」「已是（すでに)」と同様。その用法は「先自」と同じく，下句に「更」「又」「況」「那堪」等の字を伴って対応関係をもつ。唐無名氏「雑詩」其十三（『全唐詩』巻785)「早是有家帰未得，杜

鵑休向耳辺啼（早是家有りて帰るを未だ得ず，杜鵑 耳辺に向かいて啼くを休めよ）」。韋荘「長安清明」（『全唐詩』巻700）「早是傷春暮雨天，可堪芳草更芊芊[192]（早是春を傷む暮雨の天，芳草 更に芊芊たるに堪うべけんや）」。[193]

②「幸是（さいわいに）」と同様。「蚤是」も同じ。
・［早］zǎo「早是」①の省略形。「本」「已」と同様。
・［早来］zǎolái「早是」①と同じ。
・［早為］zǎowéi「早是」①と同じ。
・［早則］zǎozé「早是」②と同じ。
・［蚤是］zǎoshì「早是」②と同じ。（長谷川）

36. 早晩 zǎowǎn

①「何日」，多く将来のことを指して言う。岑参「送郭乂（郭乂を送る）雑言」（『全唐詩』巻199）「何時過東洛，早晩度盟津[194]（何れの時にか東洛に過り，早晩か盟津を度らん）」，「早晩」と「何時」は互文の関係にある。李白「口号贈徵君鴻（口号 徵君鴻に贈る）」（『全唐詩』巻168）「不知楊伯起[195]，早晩向関西（知らず 楊伯起，早晩関西に向かうを）」，「何日向関西（何れの日にか関西に向かうを）」と同様。白居易「種柳三詠（柳を種う三詠」其一（『全唐詩』巻455）「白頭種松桂，早晩見成林。不及栽楊柳，明年便有陰（白頭にして松桂を種うるも，早晩か林と成るを見ん。楊柳を栽え，明年 便ち陰有るに及ばず）」。白居易「暮帰（暮れに帰る）」（『全唐詩』巻442）「帰来長困臥，早晩得開顔（帰りて来長く困しみ臥す，早晩か開顔するを得ん）」。雍裕之[196]「農家望晴（農家晴れを望む）」（『全唐詩』巻471）「嘗聞秦地西風雨，為問西風早晩回（嘗て聞く 秦地は西風雨ふらすと，為に問う西風早晩か回らん）」。令狐楚[197]「遠別離二首」其一（『全唐詩』巻334）「春来消息断，早晩是帰時（春来 消息断ゆ，早晩か是れ帰る時ならん）」。羅隠「淮南高駢所造迎仙楼（淮南高駢の造る所の迎仙楼）」（『全唐詩』巻657）「鸞音鶴信杳難迴，鳳駕龍車早晩来。仙境是誰知処所，人間空自造楼台（鸞音鶴信 杳として迴り難く，鳳駕龍車早晩か来らん。仙境 是れ誰か処る所を知らん，人間 空自しく楼台を造る）」。

②どれほどの時間。しばしば「来」字を前に置いて「来早晩」と言い，専ら過去のことを指して言う。白居易「臥疾来早晩」（『全唐詩』巻458）「臥疾来早晩，懸懸将十旬[198]（疾に臥して 来 早晩ぞ，懸懸として将に十旬ならんとす）」，病に臥せって以来，もう何日になるだろうかと言う。白居易「正月三日閒行」（『全唐詩』巻447）「借問春風来早晩，只従前日到今朝（借問す 春風 来 早晩ぞ，只だ前日より今朝に到る）」，春風がやってきてから，もう何日になるかと言う。白居易「除夜」（『全唐詩』巻439）「潯陽来早晩，明日是三年（潯陽 来 早晩ぞ，明日是れ三年）」，潯陽にやって来てから，もうどれほどの歳月になるかと言う。白居易「棣華[199]駅見楊八題夢兄弟詩（棣華駅にて楊八の題せる兄弟を夢む詩を見る）」（『全唐詩』巻441）「遥聞旅宿夢兄弟，応為郵亭名棣華。名作棣華来早晩，自題詩後属楊家（遥かに聞く 旅宿に兄弟を夢むと，応に為に郵亭 棣華と名づくべし。名 棣華と作り 来 早晩ぞ，詩後を題してより楊家に属す。）」，棣華駅と名を定めてから，もう何年になるかと言う。

③時間を推量する言葉で，現在・過去・未来すべてに適用される。

④いつでも，毎日。杜甫「江雨有懐鄭典設（江雨に鄭典設を懐う有り）」（『全唐詩』巻231）「春雨闇闇塞峡中，早晩来自楚王宮（春雨 闇闇として峡中を塞ぎ，早晩に来ること楚王宮よりす）」，これは「いつでも」「毎日」いずれの意味でも解すことができる。韓翃[200]「送山陰姚丞携妓之任兼寄山陰蘇少府（山陰姚丞の妓を携え任に之くを送り，兼ねて山陰蘇少府に寄す）」（『全唐詩』巻243）「他日如尋始寧墅[201]，題詩早晩寄西人（他日如し始寧の墅を尋ぬれば，詩を題して早晩に西人に寄せよ）」，これは「いつでも」の意で，いつでも詩を送ってくれるのを待ちわびています，と言うのである。

⑤「那得（どうして～であろうか）」あるいは「何曽（どうして～したことがあろうか）」。これはおそらく「何日」の意から変化してきたものである。拾得詩 其三十二（『全唐詩』巻807）「箇箇入地獄，早晩出頭時（箇箇 地獄に入れば，早晩ぞ頭を出だす時あらん）」，「早晩」は一に「那得」に作る。「早晩」はすなわち「那得」の意味である。貫休[202]「大駕西幸秋日聞雷（大駕 西に幸し 秋日 雷を聞く）」（『全唐詩』巻833）「黎庶何由泰，鑾輿早晩回（黎庶 何に由りて泰からん，鑾輿早晩ぞ回らん）」，これも「那得」の意であるため，「何由」と対をなすのである。もし「何日」と解せば，意味は通じるものの，ここでは合わない。白居易「和行簡望郡南山（行簡の郡の南山を望むに和す）」（『全唐詩』巻441）「反照前山雲樹明，従君苦道似華清。試聴腸断巴猿叫，早晩驪山有此声（反照 前山 雲樹 明らかに，君の苦だ華清に似たりと道うに従す。試みに聴け 腸断巴猿の叫ぶを，早晩ぞ驪山に此の声有らん）」，「那得有此声（どうしてこんな声が聞こえるだろうか）」と言うのである。また「何曽有此声（どうしてこんな声が聞こえたことがあろうか）」と同様。（長谷川）

37. 造次 zàocì

「軽易（容易に）」「随便（ほしいままに）」「平常（つねに）」等の意味があり，秦漢以来の「急遽（にわかに）」「倉卒（あわただしい）」の意味とはすでに異なる部分がある。多く形容詞として用いられる。杜甫「驄馬行」（『全唐詩』巻216）「時俗造次那得致，雲霧晦冥方降精（時俗 造次に那ぞ致すを得ん，雲霧 晦冥にして方に精を降す）」，これは「驄馬」が簡単には得られないことを言う。杜甫「送顧八分文學適洪吉州（顧八分文学の洪吉州に適くを送る）」（『全唐詩』223）「御札早流伝，揄揚非造次（御札 早に流伝し，揄揚は造次に非ず）」，これは「絶非随便揄揚（決して好き勝手にほめたたえられるものではない）」と言うのと同様。白居易「中隠」（『全唐詩』巻445）「君若欲高臥，但自深掩関。亦無車馬客，造次到門前（君 若し高臥せんと欲せば，但だ自ら深く関を掩せ。亦た車馬の客の，造次に門前に到る無し）」。孟郊「弔元魯山（元魯山を弔う）」（『全唐詩』巻381）「遠階無近級，造次不可升（遠階 近級無く，造次に升るべからず）」，意味は上に同じ。

・［草次］cǎocì「造次」と同じ。（長谷川）

38. 則 zé

①「即」「就」（すなわち）。李端[203]「冬夜与故友聚送吉校書[204]（冬夜 故友と聚まり吉校書を送る）」（『全唐詩』巻284）「途窮別則怨，何必天涯去（途窮まれば別るるに則ち怨む，何ぞ必ずしも天涯に去らん）」，別れのときは悲しいものであり，世界の果ての遠くまで別れるのに限ったことではないと言うのである。元稹「估客樂」（『全唐詩』巻418）「估客無住著，有利身則行（估客は住著まる無く，利有れば身は則ち行く）」，「則」は一に「即」に作る。「則行」は「即行」である。白居易「金鑾子晬日[205]」（『全唐詩』巻432）「若無夭折患，則有婚嫁牽（若し夭折の患い無くんば，則ち婚嫁の牽い有り）」，「則有」は「即有」であり，前句の「若無」と対応している。無名氏「天竺国胡僧水晶念珠」（『全唐詩』巻785）「若非葉下滴秋露，則是井底円春冰（若し葉下の滴る秋露に非ざれば，則ち是れ井底の円き春冰）」，「則是」は「即是」であり，前句の「若非」と対応する。

②「即使」「就使」（たとえ～でも）。また，「雖」と同様。文章が対をなしており，前句に「則」字が用いられていた場合，「雖」と解される。杜甫「別蔡十四著作（蔡十四著作に別る）」（『全唐詩』巻220）「天地則瘡痍，朝廷多正臣（天地は瘡痍ありと則も，朝廷は正臣多し）」，「則瘡痍」とは「雖瘡痍」と言うのである。杜甫「喜晴」（『全唐詩』巻217）「丈夫則帯甲，婦女終在家（丈夫は甲を帯ぶると則も，婦女は終に家に在り）」，「則帯甲」は「雖帯甲而出征（甲を帯びて出征すると雖も）」と言うのである。杜甫「槐葉冷淘[206]」（『全唐詩』巻221）「献芹則小小，薦藻明区区（芹を献ずるは小小たりと則も，藻を薦むるは明らかにして区区たり）」，「則小小」は「雖小小」である。

③「只」に同じ。「祇」（ただ）である。（「只」は元々「祇」の略字で，語気助詞の「母也天只，不諒人只（母や天なれども，人を諒とせず）」[207]の「只」とは異なる。宋人の詩文中ではすでに「祇」は「只」に省略し

て書かれている。）限定の辞。

④「只」に同じ。「但」である。逆接の辞。

⑤「作」「做」の意。

⑥助辞。「者」に同じ。（長谷川）

39. 曾 zēng

「争」と同様。「怎」（いかでか，どうして）。杜牧[208]「辺上聞笳（辺上に笳を聞く）三首　其一」（『全唐詩』巻525）「遊人一聴頭堪白，蘇武争禁十九年（遊人一たび聴けば頭白くするに堪う，蘇武争でか十九年に禁えん）」，徐倬『全唐詩録』[209]は「争禁」を「曾経」に作る。「曾」は「争」もしくは「怎」である。「争禁」は「怎様禁当（どのようにもちこたえたのか）」と言うのであり，「曾経」は「怎様経過（どのように過ごしたのか）」と言う。意味は大同小異である。（長谷川）

40. 乍 zhà

①「恰」の意。「正」（まさに，ちょうど）。張九齢「晨坐斎中偶而成詠（晨に斎中に坐して偶たま詠を成す）」（『全唐詩』巻47）「寒露潔秋空，遥山紛在矚。孤頂乍修聳，微雲復相続（寒露秋空に潔く，遥山 紛として矚る在り。孤頂乍に修聳し，微雲 復た相続く）」，「乍修聳」は「正修聳」と言うのである。郎士元[210]「送林宗配雷州（林宗の雷州に配せらるるを送る）」（『全唐詩』巻248）「海霧多為瘴，山雷乍作鄰（海霧 多く瘴を為し，山雷乍に鄰と作る）」，「乍作鄰」は「恰作鄰」もしくは「正作鄰」と言うのである。皇甫冉[211]「台頭寺願上人院古松下有小松栽毫末新生与纖草不弁重其有凌雲干霄之志与趙八員外裴十補闕同賦之（台頭寺願上人の院の古松の下に小松の栽有り，毫末新たに生じ，纖草と弁ぜざるも，其の凌雲干霄の志有るを重んじ，趙八員外裴十補闕と同に之を賦す）」（『全唐詩』巻250）「細草亦全高，秋毫乍堪比（細草も亦た高きを全うせんとし，秋毫も乍に比するに堪う）」，「乍堪比」は「恰堪比」と言うのである。張仲素[212]「宮中楽五首 其四」（『全唐詩』巻367）「笙歌臨水檻，紅燭乍迎秋（笙歌 水檻に臨み，紅燭乍に秋を迎えんとす）」，「乍迎秋」は「恰迎秋」と言うのである。

②「初」の意。「才」（はじめて，やっと）。

③冲動（衝動）の意。また，聳竪（そびえ立つ）の意。（長谷川）

41. 乍可 zhàkě

①「只可」の意。高適「封丘作」（『全唐詩』巻213）「我本漁樵孟諸野，一生自是悠悠者。乍可狂歌草沢中，寧堪作吏風塵下（我は本漁樵たり孟諸の野，一生 自ら是れ悠悠たる者なり。乍だ草沢の中に狂歌すべし，寧ぞ風塵の下に吏と作るに堪えん）」，「我は本悠悠の徒にして，只だ草沢に狂歌すべし，豈に風塵に吏と作るに堪えん」と言うのである。元稹「蟲豸詩　浮塵子[213]三首 其一」（『全唐詩』巻399）「乍可巣蚊睫，胡為附蟒鱗（乍だ蚊睫に巣くうべし，胡為れぞ蟒鱗に附かん）」，前句は浮塵子の小さいことを言っているので，「只可」と解するべきである。後句は諷諭の辞である。

②「寧可」（むしろ，いっそのこと）の意。駱賓王「代女道士王霊妃贈道士李栄（女道士王霊妃の道士李栄に贈るに代わる）」（『全唐詩』巻77）「乍可匆匆共百年，誰使遥遥期七夕（乍ろ匆匆として百年を共にすべけん，誰か遥遥として七夕を期せしめん）」，いっそ人間世界のせかせかとした百年の方がよい，いつでも会える

のだから，天上世界の遠い遠い七夕に，かえって長く空しい時間を過ごすよりは，と言うのである。元稹「古決絶詞三首　其一」（『全唐詩』巻20，422）「乍可為天上牽牛織女星，不願為庭前紅槿枝（乍ろ天上の牽牛織女星と為るべけん，庭前の紅槿の枝となるを願わず）」，ここでは，いっそ牛女となろう，と言い，駱詩と反対の趣意を述べる。元稹「夢遊春七十韻」（『全唐詩』巻422）「乍可沈為香，不能浮作瓠（乍ろ沈みて香と為るべけん，浮きて瓠と作る能わず）」，いっそ水に沈んで香となっても，人に重んぜられる方がよい，浮んでひさごとなり，欠け落ちて物を入れることができないようなことに甘んじたくない，と言うのである。

元稹「任酔（酔うに任す）」（『全唐詩』巻411）「殷勤満酌従聴酔，乍可欲醒還一杯（殷勤に酌を満たして酔うに従聴せん，乍ろ醒めんと欲して還た一杯なるべし）」，もう一杯飲もう，と言うのである。韓愈「南溪始泛（南渓に始めて泛ぶ）三首　其三」（『全唐詩』巻342）「拖舟入其間[214]，溪流正清激。随波吾未能，峻瀨乍可刺（舟を拖きて其の間に入るに，渓流は正に清激たり。波に随うことは吾未だ能わず，峻瀨乍ろ刺すべし）」，波に随って浮き沈みするに甘んぜず，むしろ流れに棹さして進もう，と言うのである。賈島「夏夜」（『全唐詩』巻572）「唯愁秋色至，乍可在炎蒸（唯だ愁う 秋色の至るを，乍ろ炎蒸に在らんことを）」。杜荀鶴「秋日閑居寄先達（秋日閑居して先達に寄す）」（『全唐詩』巻692）「乍可百年無称意，難教一日不吟詩（乍ろ百年 意に称う無かるべきも，一日として詩を吟ぜざらしむることを難しとす）」，以上の各詩は解説を俟たない。

・［乍］zhà 「乍可」②と同じ。「乍可」の省略形。謝霊運[215]「述祖徳詩（祖徳を述ぶる詩）二首　其一」（『文選』巻19）「臨組乍不縲，対珪寧肯分（組に臨みて乍ろ縲がれず，珪に対して寧ぞ肯て分かたれん）」，「珪組」は仕官の事を指し，「乍」と「寧」は互文となる。組に臨んでもむしろつながず，珪に対してもどうしてあえて分かち受けるだろうか，と言うのである。李白「設辟邪伎鼓吹雉子斑曲辞（辟邪伎を設け雉子斑の曲辞を鼓吹す）」（『全唐詩』巻17，163）「乍向草中耿介死，不求黄金籠下生（乍ろ草中に耿介して死せん，黄金の籠下に生くるを求めず）」，むしろ草むらの中でかたく操を守って死のう，と言うのである。孟郊「上張徐州（張徐州に上る）」（『全唐詩』巻377）「乍作支泉石，乍作翳松蘿。一不改方圓，破質為琢磨（乍ろ支泉の石と作り，乍ろ翳松の蘿と作らん。一に方円を改めて，質を破りて琢磨を為さざらん）」，むしろ支泉の石，翳松の蘿となり，空山の中に跡を隠して，決して方円を改めて本質を損なうことをしない，と言うのである。

・［乍能］zhànéng 「乍可」②と同じ。白居易「和夢遊春詩一百韻」（『全唐詩』巻437）「不忍曲作鉤，乍能折為玉（曲げて鉤と作るに忍びず，乍ろ能く折けて玉為らん）」，ここでは玉となって砕けるの意となる。元稹「酬翰林白学士代書一百韻」（『全唐詩』巻405）「乍能還帝笏，詎忍折吾支（乍ろ能く帝笏を還し，詎ぞ吾が支[216]を折るに忍びん）」，ここでは，いっそ致仕して腰を折ることをしたくないの意となる。（長谷川）

おわりに

以上，41の用例を訳出してきた。これまでの検討の結果，「底」「向」など，指示詞に加えて副詞や動詞の用法など様々な機能を持つ語が見出された。また「早晩」のように，時を表す用法においても「将来」「どれほどの時間」「現在・過去・未来全ての時間を推量する」「いつでも」といったあらゆる時間を表す語彙も見出され，一つの語彙の汎用性の高さを示している。

今後も唐詩の用例を中心としてこの訳出と検討を進め，異読語彙の全体像を把握することを目標としている。またその過程で，個別の詩人における用法の特徴や，時代や地方に共通する傾向，時代ごとの語義の変遷などもあわせて検討したいと考えている。しかし用例が膨大なため，誤読の可能性もある。ご示教を仰ぐ次第である。

付記

本稿は平成28年～令和元年度文部科学省助成金科学研究費基盤研究Ｃ「唐詩における異読の包括的研究」（研究代表者 東京学芸大学佐藤正光）における研究成果のひとつである。

注

1　北宋・郭茂倩撰『楽府詩集』（中華書局，1979年）。
2　王維（699-759），字は摩詰，河東（山西省永済市）のひと。
3　杜甫（712-770），字は子美，原籍は河南省鞏県，襄陽（河南省洛陽市南）のひと。
4　白居易（772-846），字は楽天，号は香山居士，原籍は下邽（陝西省渭南県），河南新鄭（鄭州新鄭）のひと。
5　『全唐詩』は「長」に作る。
6　杜荀鶴（846-904），池州石埭（安徽省石台）のひと。
7　韓愈（768-824），字は退之，諡は文公，鄧州南陽（河南省孟州市）のひと。
8　李商隠（812-858），字は義山，号は玉谿生，懐州河内（河南省沁陽市）のひと。
9　『全唐詩』は「烏」に作る。
10　『全唐詩』は「空（一作寒）閨怨」に作る。
11　王建（?-830?），字は仲初，潁川（河南省許昌）のひと。
12　韓偓（844-923），字は致堯（一説に致光），京兆万年県（陝西省西安市）のひと。
13　元稹（779-831）,字は微之，河南洛陽（河南省洛陽市）のひと。
14　『全唐詩』は詩題を「病酔」に作り，「戯作」以下は序とする。
15　温庭筠（812-872），字は飛卿，幷州太原（山西省）のひと。
16　李嘉祐，生卒年不詳，字は従一，趙州（河北省趙県）のひと。
17　陸亀蒙（?-881）字は魯望，呉郡（蘇州市）のひと。
18　現在でも広東では「趁墟」・「趕市」の語が用いられている。
19　方干（809-888），字は雄飛，号は玄英，睦州青渓（淳安）のひと。
20　罅はすき間の意味。
21　劉孝綽（481-539），南朝梁のひと，名は冉。字は孝綽，彭城（江蘇省銅山県）のひと。
22　逯欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局，1983年）。
23　張謂（711?-?），字は正言，河内（河南省沁陽市）のひと。
24　船のこと。
25　梁の武帝（464-549），蕭衍，字は叔達，南蘭陵郡（江蘇省常州市）のひと。
26　朝のかすみのことか。
27　薛能（817-880），字は大拙，汾州（山西省汾陽県）のひと。
28　長江，黄河，淮河，済水を総称していう。
29　仇兆鰲注『杜詩詳注』巻十四「懐錦水居止」二首其一。
30　寒山，生卒年不詳，晩唐のひと。浙江省天台山の国清寺にいたとされる僧侶。
31　羅隠（833-910），字は昭諫，余杭新城（浙江省富陽）のひと。
32　『全唐詩』は「自喜」に作る。
33　駱賓王（640?-684?），婺州義烏県（浙江省金華市義烏市）のひと。
34　将雛の曲とは，古曲の「鳳将雛」のこと。
35　張九齢（673?-740），字は子寿，諡は文献，韶州曲江県（広東省韶関市）のひと。
36　孟浩然（689-740），名は浩，浩然は字，号は鹿門処士，襄陽（湖北省襄陽市）のひと。
37　筆者未見。朱東潤『中国歴代文学作品選』中編『唐詩選』のことか。
38　宋・陸游撰，楊立英校注『老学庵筆記』（三秦出版社，2003年）。
39　『世説新語』賞誉第八。
40　『晋書』巻98桓温伝。
41　『宋書』巻93陶潜伝。
42　盧綸（737-799），字は允言，河中蒲県（山西省蒲県）のひと。
43　皇甫冉（718?-771?），字は茂政，潤州丹陽（江蘇省鎮江市）のひと。
44　王揆（生卒年不詳），長沙（湖南省）のひと。

45 王揆が六君子を譏った詩，六快とは周沆・趙良規・李碩・劉舜臣・朱景陽・許玄を指す（宋・文瑩『湘山野録』巻上による）。
46 岑参（715?-770），字は不明，南陽（河南省南陽市）のひと。
47 孟雲卿（生卒年不詳），平昌（河南省商河県）のひと。
48 孟郊（751-814），字は東野，湖州武康（浙江徳清県）のひと。
49 戴叔倫（732-789），字は幼公，または次公，潤州金壇県（江蘇省）のひと。
50 李益（748-827），字は君虞，鄭州のひと。
51 水が巡り流れるさま。
52 韋荘（836-910），字は端己，京兆杜陵（陝西省長安）のひと。
53 李白（701-762），字は太白，号は青蓮居士，西域に生まれ，幼少期に蜀の青蓮郷（四川省江油県）に移り住んだといわれる。
54 劉脊虚，生卒年不詳，または劉慎虚，字は全乙，号は易軒，新呉（江西省奉新県）のひと。
55 王融の字。
56 『荘子注』巻2（『四庫全書』第1056冊所収）。
57 『続修四庫全書』第1281冊所収。
58 『続修四庫全書』第1281冊所収。
59 『魯迅全集』第8巻「古小説鉤沈」所収。
60 『続修四庫全書』第117冊所収。
61 『全唐詩』は「復却」に作る。
62 『全唐詩』は「心心」に作る。
63 『全唐詩』は「家人」に作る。
64 魏文帝（187-226），曹丕，字は子桓。予州沛国（安徽省亳州市）のひと。
65 劉長卿（?-789?），字は文房。河間（河北省）のひと。
66 無実の罪を受けながら釈明できないこと。
67 柳宗元（773-819），字は子厚，河東（山西省永済県）のひと。
68 『全唐詩』は「会」に作る。
69 『杜詩詳注』は「時」に作る。
70 『全唐詩』は「病酒開涓滴」に作る。
71 張籍（766?-830?），字は文昌，呉郡（蘇州）のひと。
72 韋応物（737-792?），字は不詳，京兆万年（陝西省西安市）のひと。
73 清・楊倫撰『杜詩鏡銓』20巻（1962年　中華書局排印本）。
74 清・仇兆鰲撰『杜少陵集詳注』25巻（1933年　上海商務印書館排印本）。
75 太陽のこと。
76 大地のこと。
77 『四庫全書』第1042冊所収。
78 『四庫全書』第1045冊所収。
79 『四庫全書』は「開」につくる。
80 清・施鴻保『読杜詩説』24巻（1962年 中華書局排印本）。
81 『全唐詩』は「為向」に作る。
82 竇鞏（762?-821），字は友封，京兆金城（陝西省西安市）のひと。
83 『全唐詩』は「峡中船」に作る。
84 鮑溶（775?-?），字は徳源。元和4年の進士。
85 皮日休（838-883），字は襲美，襄陽（湖北省襄陽市）のひと。
86 『全唐詩』は「哀」に作る。
87 王表，生卒年不詳，大暦14年の進士。
88 張祜（782?-852?）字は承吉，山陽（河南省）のひと。

89　薛涛（768-831），唐代中期の伎女・詩人。字は洪度。
90　張籍（766?-830?），字は文昌，呉郡（蘇州）のひと。
91　賈島（779-843），字は浪仙，または閬仙，范陽（今の河北省）のひと。
92　羅鄴（825-?），浙江省余杭のひと。
93　王昌齢（698－755），字は少伯。
94　『全唐詩』は「徴兵」につくる。
95　『四庫全書』第1045冊所収。
96　『四庫全書』第1044冊所収。
97　宋・洪邁『夷堅志』（中華書局排印本　1981年）。
98　成彦雄，字は文干，生卒年不詳。南唐の進士。上谷（河北省懐来）のひと。
99　漏壺のこと。
100　杜秋娘，生卒年不詳。金陵（江蘇省南京）の人。唐代金陵の歌妓。
101　白絹を以て作画と作文をすること。
102　箱のこと。
103　虫の名。蟫。または衣魚。書籍と衣服を食い壊す。
104　崔国輔（687?-755?）字は不詳，『唐才子伝』では山陰（浙江省紹興市）の人。『全唐詩』では呉郡（江蘇省蘇州市）の人。
105　涙の化粧のこと。裛は浥に通ず。
106　周公は卜事をして洛邑を択んで東都とする。後に新都は卜洛と呼ばれる。
107　古代に朝廷で行われた年中行事の一つ。3月上巳に，朝臣が川に臨んで，上流から流される杯が自分の前を過ぎないうちに詩歌を作り杯をとりあげ酒を飲み，次へ流す。
108　射場。
109　かわらで井戸の壁を造ること。
110　趙嘏（806-852），字は承祐，楚州山陽（江蘇省淮安）のひと。
111　申不害，商鞅を指す。
112　県名。今河南省の済源県。
113　上官婉児（664-710），また上官昭容，上官倢伃と称す。陝州陝县（河南省陝県）のひと。
114　また「流觴」に作る。さかずきを浮かす。
115　今河南省の三門峡市。
116　あつまることと別れること，苦難と顕赫のこと。
117　呉融（?-903），字は子華，越州山陰（浙江省紹興）のひと。
118　劉禹錫（772-842），字は夢得，洛陽のひと。
119　司空は見慣れて珍しがらないこと。
120　張祜（782?-852），字は承吉，南陽（河南省）のひと。
121　『東坡詩集注』，四庫叢刊景宋本所収。
122　『陶淵明集』，宋刻遞修本。
123　スズメのさがわしい音。
124　猿のうずくまるさま。
125　高適（700?-765），字は達夫，渤海蓨県（河北省景県）のひと。
126　張籍（766?-830?），字は文昌，呉郡（江蘇省蘇州）のひと。
127　李紳（772-846），字は公垂，潤州無錫（江蘇省無錫）のひと。
128　姚合（775?-855?），字は不詳，陝州（河南省陝県）のひと。
129　李遠（?-860?），字は求古，夔州雲安（重慶雲陽）のひと。
130　旆旗のこと。
131　眉間にしわを寄せること。
132　李頻（?-876），字は徳新，睦州寿昌（浙江省建徳）のひと。
133　反切のこと。中国に古くからある漢字音の表記法の一つ。

134 対句を作る技法。
135 飢えながら臥すること。
136 ややもすれば。
137 「何止」と同じ。
138 継ぎをたくさん当てる。
139 沈佺期（656-715），字は雲卿，相州内黄（河南省内黄）のひと。
140 裴迪，生卒年不詳，字は昇之，関中（陝西省関中盆地の周辺）のひと。
141 元結（719-772），字は次山，魯山（河南省）のひと。
142 孟士源のこと。孟士源は元結と一緒に武昌の山の中に隠居した。
143 親友のこと。
144 哭師皋。皋，水辺の平らかな地。白居易の先生の墓の所在地を指す。同詩に「妻孥兄弟号一声，十二人腸一時断。往者何人送者誰，楽天哭別師皋時」とある。
145 王諲，生卒年，籍貫不詳，開元年間の進士。
146 喩鳧，生卒年不詳，常州（江蘇省）のひと。
147 霞脚，低くて地面に近づいた霞。
148 高瞻，字は瞻叔，生卒年不詳。晩唐の詩人。
149 李建勲（873?-952），字は致堯，広陵（江蘇省揚州）のひと。
150 于瀆，生卒年不詳，字は子漪，長安（西安）のひと。
151 杜寛，人物不詳。
152 李洞（?-897?），字は才江，京兆（陝西省西安）のひと。
153 遠くを眺めること。
154 司空曙（720?-790?），字は文明，広平（河北省鶏沢）のひと。
155 崔曙（?-739），字は不詳，博陵（河北省安平）のひと。
156 李嘉佑，生卒年不詳，字は従一，起郡（河北趙県）のひと。
157 上陽，唐代の宮殿の名，洛陽にある。
158 権德輿（758-815），字は載之，天水略陽（甘粛省秦安）のひと。
159 『晋書』張華伝「煥到県，掘獄屋基，入地四丈余，得一石函，光気非常，中有双剣，并刻題，一曰竜泉，一曰太阿。」
160 盧照隣（634-686），字は昇之，幽州范陽（河北省涿州）のひと。
161 劉長卿（?-790?），字は文房，宣州（安徽省宣城）のひと。
162 李群玉（808?-862），字は文山，澧州（湖南省澧県）のひと。
163 徐陵（507-583），字は孝穆，南朝陳の東海郯のひと。
164 『陳文紀』，清文淵閣四庫全書所収。
165 皮日休（834?-883?），字は逸少，襄陽（湖北省襄樊）のひと。
166 紀県，中国の県名，甘粛省の東南部にある。
167 李山甫，生卒年，字，籍貫不詳。
168 漢の武帝の時に建てられた。唐の呂温は「望思台銘」ある。
169 張安石，生卒年，字，不詳。
170 賈島（779-843），字は浪仙，范陽（北京西南）のひと。
171 植物名。丘陵の間に繁殖する。
172 陸希声（?-895?），字は不詳，蘇州呉（江蘇省蘇州）のひと。
173 讒言のこと。
174 李端，生卒年未詳，大暦五年進士，趙州（河北省）のひと。大暦十才子のひとり。
175 項斯（815-?），字は子遷，江東のひと。
176 興得駅（興徳駅）今の陝西省大荔県南。
177 「蹔」，『全唐詩』は「暫」に作る。
178 『全唐詩』は「読書良有感，学剣慚非智。」に作る。

179 一に韓翃の作とする。(『全唐詩』巻245)

180 銭起（722-780?），字は仲文，呉興（浙江省呉興県）のひと。

181 何遜（?-518?），字は仲言，南朝梁の詩人。

182 涙化粧。涙を流したようにする化粧法のことも指すが，ここでは涙でおしろいが流れるさまを指すか。

183 「蹔」『全唐詩』は「暫」に作る。

184 「八座」は唐代には左右僕射と六尚書を指す。「旌旗」は軍旗，すなわち節度使に任を指す。

185 独孤及（725-777），字は至之，河南洛陽のひと。

186 龍蛇のわだかまるさま。

187 「蹔」『全唐詩』は「暫」に作る。

188 「暫」『全唐詩』は「蹔」に作る。

189 仏教儀式のひとつで，香炉を持って仏殿を巡り歩く。

190 李賀（790-816），字は長吉，福昌（河南省福昌県）のひと。

191 異民族の懐柔のために政略結婚させられた公主。王昭君が最も有名。

192 草の盛んに茂るさま。

193 『文苑英華』巻157に拠る。「早」，『全唐詩』は「蚤」に作る。「暮」，『才調集』巻3，『唐詩紀事』巻68，『全唐詩』は「夢」に作る。

194 「孟津」に同じ。洛陽の東にある黄河の渡し場。

195 後漢の楊震（54-124），字は伯起，弘農華陰（陝西省華陰市）のひと。世俗を厭い学問に勤しんだが，天子に再三詔書を下されて都に上った。

196 雍裕之，生卒年不詳，字は未詳，成都のひと。

197 令狐楚（766-837），字は殻士，敦煌のひと。

198 はるかに遠いさま。ここでは時間の隔たりが大きいことか。

199 ニワウメの一種で，花がいくつも集まって咲くことから兄弟に喩える。『詩経』小雅に「常棣」があり，兄弟相和することに喩えて歌う。

200 韓翃（生卒年未詳），字は君平，南陽（河南省）のひと。

201 県名。今の浙江省。詩題の「山陰」も今の浙江省に属するため言う。

202 貫休（832-912），晩唐・五代の詩僧，俗姓姜氏，蘭渓のひと。

203 李端（732-792），字は正己，趙州（河北省）のひと。大暦十才子のひとり。

204 「吉校書」は吉中孚（生卒年未詳），字は未詳，楚州（江蘇省淮安市）のひと。大暦十才子のひとり。大暦中に校書郎を授かる。

205 一歳の誕生日。

206 夏に食べる団子状の冷やした食べ物。

207 『詩経』鄘風「柏舟」。

208 杜牧（803-853），字は牧之，京兆万年（陝西省長安県）のひと。

209 徐倬（1624-1713），字は方虎，浙江徳清の人。『全唐詩録』（『全唐詩』の簡約版）一百巻を撰し，『全唐詩』の刊行よりも一年早い康熙四十五年（1706）に刊行した。

210 郎士元（727-780?），字は君胄，中山（河北省定県）のひと。

211 皇甫冉（714-767），字は茂政，安定郡（寧夏回族自治区及び甘粛省）朝那県のひと。

212 張仲素（769?-819），字は絵之，河間（河北省）のひと。

213 虫の一種。ブヨ。

214 『全唐詩』「拖」を「虬」に作る。

215 謝霊運（385-433），南朝宋の詩人。陳郡陽夏（河南省太康県）のひと。

216 「肢」に同じ。腰の意。